岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 238

特別名勝 岡山後楽園
史　　跡 岡山城跡

岡山後楽園史跡整備事業に伴う発掘調査

２０１３

岡 山 県 教 育 委 員 会

1　御舟入跡全景（南西から）

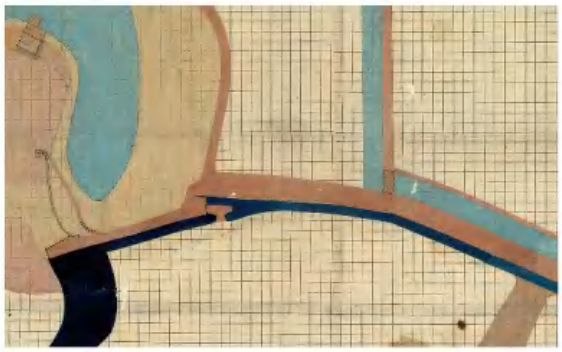
2　Ⅱ期の通路 2（南西から）

3　Ⅱ期の通路 2（北東から）

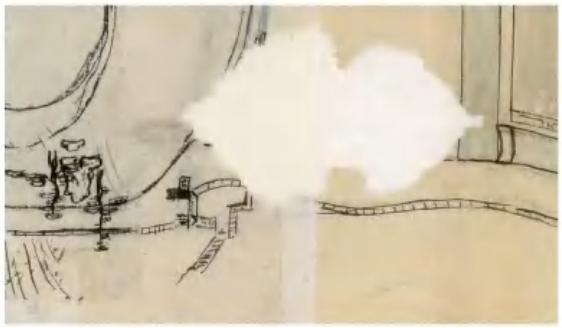
4　門（東から）

巻頭図版 2

1 「後楽園地下ヶ絵図」（年未詳）



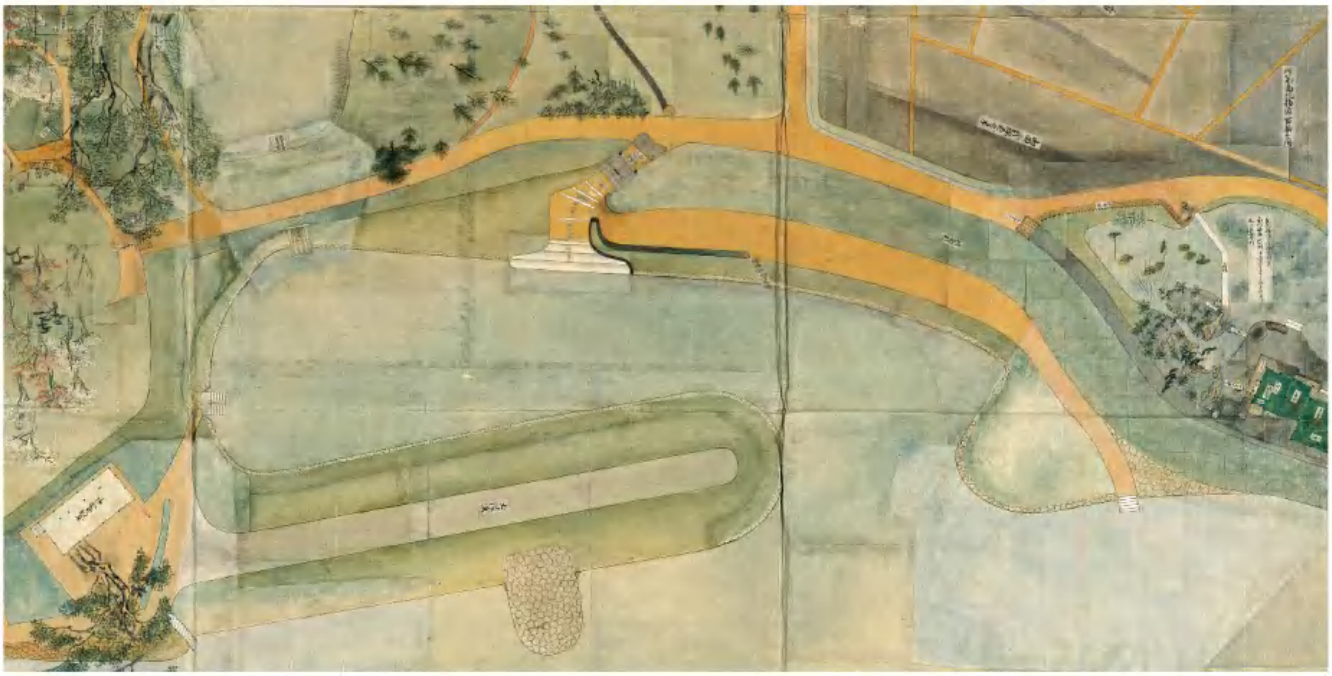
2 「御後園指図」（元禄 2 年頃）



3 「御後園絵図」（元禄初期頃）

4 「後楽園図 御茶屋廻り之図」（元禄 3 年頃）

5 「岡山絵図」（宝永 5 年頃）



6 「御後園地割御絵図」（正徳 2 年頃）

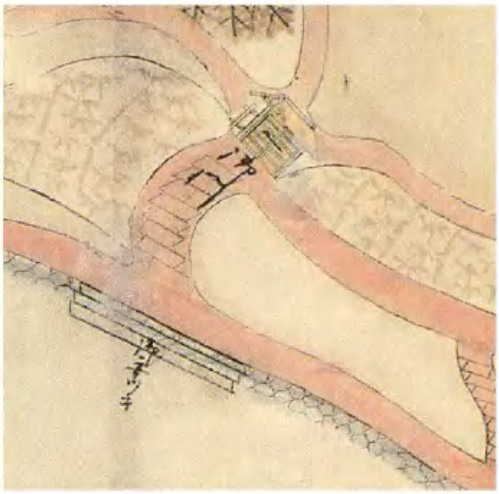
1 ～ 6　岡山大学附属図書館所蔵

1 「御茶屋御絵図」（享保元年頃）

2 「御茶屋御絵図」（地形図と合成）

3 「御茶屋御絵図」（雁木部分拡大）

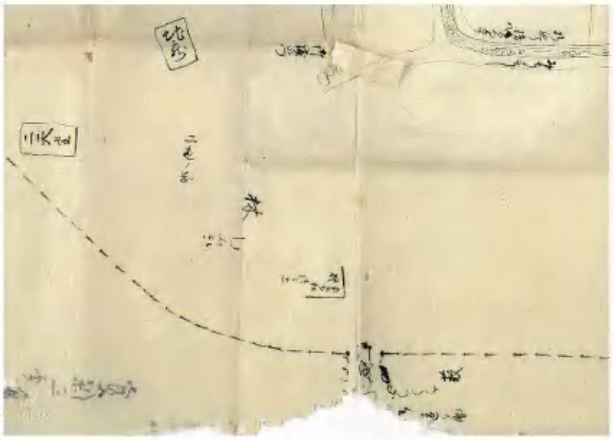
4 「御後園絵図」（明和 8 年）



5 「御後園絵図」（雁木部分拡大）

1 ～ 3 ：岡山後楽園事務所所蔵、 4 ・ 5 ：岡山大学附属図書館所蔵

巻頭図版 4



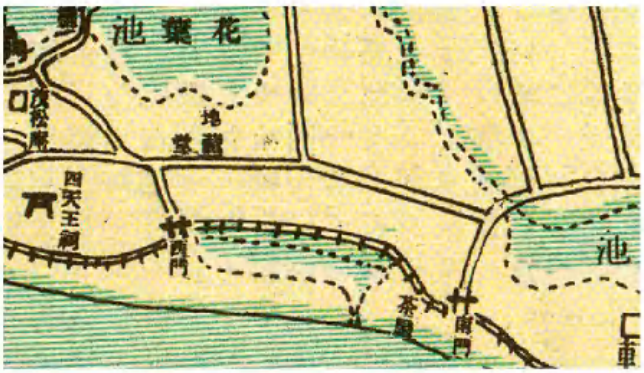
1 「御後園下図」（寛保 3 年）

2 「御後園絵図」（文久 3 年）

3 「御後園御成御門筋絵図」（年未詳）

4 「備前国岡山後楽園真景図」（明治16年）

5 「岡山後楽園之図」（明治30年）



6 「岡山市街地圖」（昭和 5 年）

1 ～ 4 ：岡山大学附属図書館所蔵、 5 ：岡山県立図書館所蔵、 6 ：国際日本文化研究センター所蔵

序

本書は、岡山後楽園史跡整備事業に伴い発掘調査を実施した、特別名勝岡山後楽園・史跡岡山城跡の発掘調査報告書です。

岡山後楽園は、江戸時代の元禄年間に岡山藩主池田綱政が郡代津田永忠に命じて築かせた庭園であり、水戸偕楽園・金沢兼六園と並び日本三名園の一つに数えられるとともに、岡山県を代表する文化遺産として、築庭以来300年を経った今でもその輝きを失っていません。

岡山県では、この岡山後楽園の魅力向上事業として園内の保全改修を４か年計画で進めており、その一環として御舟入跡の整備を計画しました。

御舟入跡とは、岡山藩主が対岸の岡山城と岡山後楽園を往来する際に使用した舟着き場の跡ですが、現在では園路から外れた竹林となっていて、長い間活用されていませんでした。そこで、この御舟入跡の保存状況を明らかにし、今後の整備に役立てることを目的として発掘調査を実施しました。

調査の結果、舟を乗り降りするための雁木、舟溜まりを囲う護岸石垣、御舟入跡から園内に至る通路・門などが見つかりました。中でも雁木は保存状態がよく、他に類例のない構造や県内最大となる規模は岡山後楽園の玄関口にふさわしい格式を備えていました。

本書が、文化財の保護・保存の一助となり、またこの地域の歴史の解明にいささかでも貢献できれば幸いです。

最後に、発掘調査及び報告書作成にあたりましては、特別名勝岡山後楽園保存管理委員会の先生方から御指導を賜り、また都市計画課並びに岡山後楽園事務所からは多大な御協力をいただきました。記して深く感謝申し上げます。

平成25年３月

岡山県古代吉備文化財センター
所　長　平　井　泰　男

例　言

1　本書は、岡山後楽園史跡整備事業に伴い、岡山県教育委員会が岡山県土木部都市計画課の依頼を受け、岡山県古代吉備文化財センターが実施した特別名勝岡山後楽園・史跡岡山城跡の発掘調査報告書である。

2　発掘調査地は、岡山市北区後楽園１番５号に所在する。

3　御舟入跡は、平成23年６月１日～21日と平成24年１月23日～30日に岡山県古代吉備文化財センター職員 上栫武が担当して確認調査（108㎡）を、平成24年４月２日～７月11日に同センター職員 小林利晴・小嶋善邦が担当して発掘調査（410㎡）を実施した。

　また、平成24年６月20日～７月６日に同センター職員 小林・小嶋が担当して花交の池の確認調査（６㎡）を、平成24年１月25・26日と７月２日に同センター職員 石田爲成が担当して烏帽子岩の確認調査（３㎡）を実施した。

4　本書の作成は、平成24年度に小林（10月～３月）・小嶋（７月～９月）が担当した。

5　本書の執筆は小林・小嶋・上栫・宇垣匡雅・石田が担当し、全体の編集は小林が行った。

6　発掘調査にあたっては、岡山県埋蔵文化財専門委員 稲田孝司氏、特別名勝岡山後楽園保存管理委員会委員各氏より御指導・御教示をいただいた。記して深く謝意を表する。

7　独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所 高妻洋成氏に漆喰の分析・鑑定について指導・助言をいただくとともに、その結果について報文をいただいた。また、岡山大学 鈴木茂之氏には、雁木の石材について御教示を受けた。さらに、公益財団法人岡山県郷土文化財団 万城あき氏から、岡山後楽園の文献史料について玉稿をいただいた。

8　巻頭図版・図版に掲載した絵図は、所蔵者である岡山大学附属図書館、岡山後楽園事務所、岡山県立図書館、国際日本文化研究センターの許可を得て複製・掲載したものである。

9　遺物写真については、江尻泰幸氏の協力と援助を得た。

10　本書に関する出土遺物および図面・写真等は、岡山県古代吉備文化財センター（岡山市北区西花尻1325-3）に保管している。

凡　例

1　本書に用いた高度値は海抜高である。

2　遺跡のグリッドは、国土座標（世界測地系）に準拠し、方位は平面直角座標系Ⅴの座標北である。

3　本報告書に掲載した遺構・遺物の縮尺は個々に明記した。

4　遺物番号については、陶磁器・瓦を除いて番号の前に次の略号を付した。

　金属器：M

5　第２図は岡山市発行の岡山市街図157・158・167・168（1/2,500）を複製・加筆したものである。

6　土層や遺物の色調は農林水産省農林水産技術会議事務局・（財）日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖』を参考にした。

7　本書に用いた時代区分は一般的な政治史区分に準拠し、暦年代は西暦と和暦を併用した。

8　本書で使用している次の絵図については、（　）の略称を併用した。

岡山大学附属図書館所蔵「池田家文庫」

「後楽園地下ヶ絵図」　（地下ヶ図）

「御後園地割御絵図」　（正徳の絵図）

「御後園下図」　（寛保の絵図）

「御後園絵図」　（明和の絵図）

「御後園絵図」　（文久の絵図）

「備前国岡山後楽園真景図」（明治の絵図）

岡山後楽園事務所所蔵

「御茶屋御絵図」　（享保の絵図）

目　次

巻頭図版
序
例言
凡例
第１章　序説…… 1
　第１節　位置と環境…… 1
　第２節　調査の経過…… 4
第２章　発掘調査の成果…… 9
　第１節　御舟入跡の調査…… 9
　第２節　花交の池の調査…… 21
第３章　総括…… 23
　第１節　御舟入跡の考古学的検討…… 23
　第２節　絵図から見た御舟入跡の歴史と変遷…… 24
　第３節　文献から見た岡山後楽園の御舟入と御成御門…… 29
　第４節　岡山後楽園御舟入跡検出園路および花交の池上流部水路護岸の漆喰の自然科学分析……33
図版
報告書抄録

図目次

第１図　遺跡位置図（1/1,500,000）…… 1
第２図　後楽園と岡山城（1/8,000）…… 2
第３図　調査地位置図（1/3,000）…… 3
第４図　御舟入跡調査区配置図（1/800）…… 4
第５図　御舟入跡トレンチ１～３土層断面図（1/100）5
第６図　御舟入跡トレンチ４・５（1/60）…… 6
第７図　烏帽子岩トレンチ配置図（1/200）…… 6
第８図　御舟入跡調査範囲図（1/400）…… 7
第９図　御舟入跡遺構配置図（1/200）…… 9
第10図　調査区東壁土層断面図（1/100）……10
第11図　調査区西壁南側土層断面図（1/100）……11
第12図　中央トレンチ土層断面図（1/100）……11
第13図　調査区西壁北側土層断面図（1/100）……12
第14図　調査区北壁土層断面図（1/100）……12
第15図　雁木等平・立面図（1/80）……13・14
第16図　石材区分図 ……13・14
第17図　土留め石垣東・西立面図（1/60）……15
第18図　雁木下段東・西立面図（1/60）……15
第19図　Ⅰ期の遺構（1/150）……17
第20図　Ⅱ期の遺構（1/150）……17
第21図　Ⅱ期の通路２および門（1/60）……18
第22図　Ⅱ期の通路２および門出土遺物（1/3・1/4）…19
第23図　Ⅲ期の遺構（1/150・1/60）……20
第24図　花交の池トレンチ配置図（1/800）……21
第25図　花交の池トレンチ１～８（1/50）……22
第26図　矢穴縦断面比較（1/5）……23
第27図　雁木長・幅散布図 ……25
第28図　絵図による御舟入復原図（1/400）……26
第29図　雁木下段と「享保の絵図」……26
第30図　漆喰試料の偏光顕微鏡写真 ……36
第31図　漆喰試料のX線回析分析 ……36
第32図　漆喰試料のFT-IR分析 ……36

巻頭図版目次

巻頭図版１
1　御舟入跡全景（南西から）
2　Ⅱ期の通路２（南西から）
3　Ⅱ期の通路２（北東から）
4　門（東から）

巻頭図版２
１「後楽園地下ヶ絵図」（年末詳）
２「御後園指図」（元禄２年頃）
３「御後園絵図」（元禄初期頃）
４「後楽園図 御茶屋廻り之図」（元禄３年頃）
５「岡山絵図」（宝永５年頃）
６「御後園地割御絵図」（正徳２年頃）
巻頭図版３
１「御茶屋御絵図」（享保元年頃）
２「御茶屋御絵図」（地形図と合成）
３「御茶屋御絵図」（雁木部分拡大）
４「御後園絵図」（明和８年）
５「御後園絵図」（雁木部分拡大）
巻頭図版４
１「御後園下図」（寛保３年）
２「御後園絵図」（文久３年）
３「御後園御成御門筋絵図」（年末詳）
４「備前国岡山後楽園真景図」（明治16年）
５「岡山後楽園之図」（明治30年）
６「岡山市街地圖」（昭和５年）

図版目次

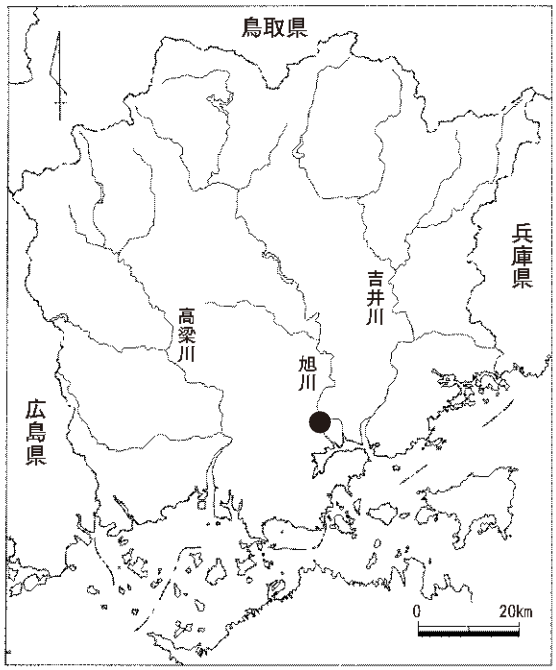
図版１
１　御舟入跡全景（南から）
２　御舟入跡全景（南東から）
３　雁木検出状況（南から）
４　雁木等検出状況（西から）
図版２
１　雁木下段と東側土留め石垣（南から）
２　雁木下段東側（南東から）
３　東側土留め石垣と平坦面（西から）
４　雁木下段と東側土留め石垣（南東から）
５　雁木下段東側（東から）
図版３
１　雁木と西側土留め石垣（南から）
２　西側土留め石垣と平坦面（南東から）
３　雁木下段西側（南西から）
４　雁木下段西側（西から）
５　雁木下段と西側土留め石垣（南西から）
図版４
１　雁木中段東端（南から）
２　東側土留め石垣北端（南西から）
３　東側土留め石垣屈曲部（南から）
４　西側土留め石垣（南東から）
５　西側土留め石垣屈曲部（南西から）
６　雁木中段と西側土留め石垣（南から）
図版５
１　護岸石垣西側（南から）
２　護岸石垣中央西側（南から）
３　護岸石垣中央東側（南から）
４　護岸石垣東側（南から）
５　矢穴のある雁木石材（南から）
６　雁木石材の矢穴（南から）
７　段状に加工した雁木石材１（南から）
８　段状に加工した雁木石材２（南から）
図版６
１　門（北西から）
２　門（南西から）
３　門断面（南西から）
４　Ⅱ期の通路２縁石（東から）
５　門付近鎹出土状況（南東から）
６　Ⅰ期の通路２南側集石（北西から）
７　Ⅰ期の通路２北側集石（北西から）
図版７
１　Ⅰ期の園路（東から）
２　Ⅲ期の通路１・２（西から）
３　Ⅰ期の通路１（西から）
図版８
１　西壁南側（東から）
２　西壁北側（東から）
３　北壁（南から）
４　東壁北側（北西から）
図版９
１　トレンチ１三和土護岸（北東から）
２　トレンチ３三和土護岸（北東から）
３　トレンチ６（北から）
４　トレンチ８（東から）
図版10
門出土鉄器

第１章　序　説

第１節　位置と環境

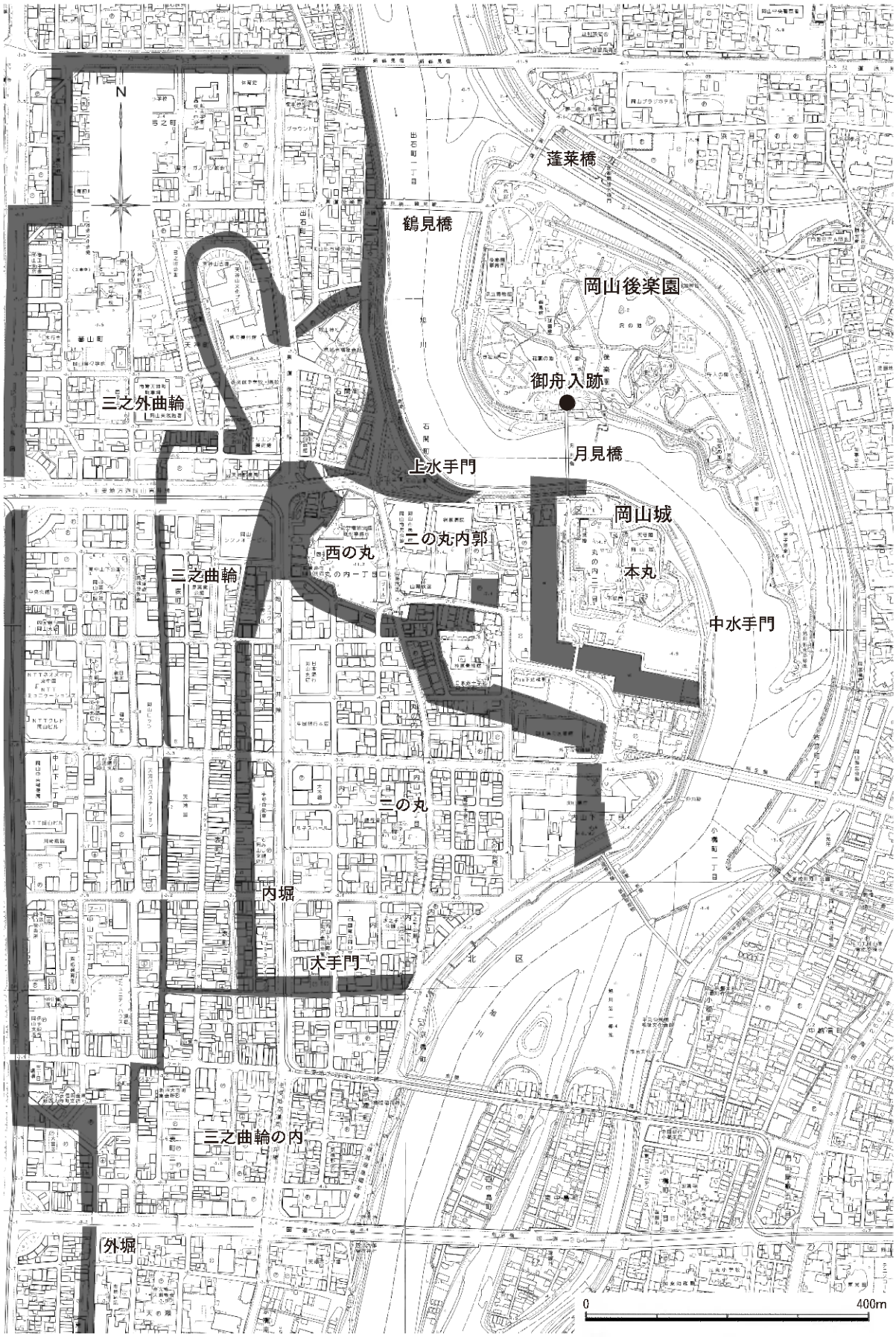
北を半田山・龍ノ口山、東を山王山、西を京山、南を操山で囲まれた沖積平野の中央に、岡山・石山・天神山と呼ばれる標高20ｍほどの独立丘陵がある。この一帯では弥生土器や埴輪の出土が知られ、古墳時代以前には居住あるいは墳墓の地として利用されていたものと思われる。大永年間（1521～27）には松田氏麾下の金光備前が石山に在城したことが知られるが、天正元年（1573）に宇喜多直家が入城して城域の拡張を行い、その子秀家は本丸を岡山に移して近世城郭としての岡山城を完成させた。関ヶ原戦後、宇喜多氏に代わって入城した小早川秀秋は城下の整備につとめ、元和元年（1615）に兄池田忠継（前期池田家初代）の跡を襲った二代忠雄の時にその大綱が定まった。

忠雄はまた、本丸に月見櫓を築くとともに花畑御殿を設けて憩いの場とした。この御殿は後に操山西麓へ移されたが、寛永９年（1632）に鳥取城から入封した池田光政（後期池田家初代）によって廃された。しかし、16世紀後半から大名庭園の築造が盛んになると、二代綱政もその造営を企図し、場所を岡山城の対岸に求めた。これは、城から至近の地でありながら旭川の流れにより隔絶されており、藩主の私的空間として好適な環境と考えられたからであろう。今回調査を実施した御舟入は、そうした後楽園の特殊な立地から必要とされたものであり、この庭園を特色付ける施設と言ってよい。もっとも、後楽園の完成後間もない宝永４年（1707）には城下との間に仮橋が架けられ、藩士や参観を許された領民たちはこれを利用している。御茶屋あるいは御後園と呼ばれたこの庭園の築造は貞享４年（1687）にはじまり、元禄13年（1700）には敷地の造成を終えて完成をみる。当初は、平坦な地勢に池を穿った回遊式庭園であったが、三代継政の時には土砂をかきあげて唯心山が築かれ、四代治政の時には敷地の1/4を占めていた菜園が芝生地に変えられて、今日、後楽園の特徴とされる平明で開放的な景観が形作られた。絵図によると、御舟入は宝永５年までに築造されており、南門は藩主専用の出入り口として御成御門と呼ばれている。しかし、たび重なる大水により舟溜まりの使用が困難になったようで、文久３年（1863）の絵図では川岸に建てられた新御成御門と草に埋もれた雁木が描かれている。



第１図　遺跡位置図（1/1,500,000）

明治維新後、岡山城とともに新政府へ引き渡されていた後楽園は岡山藩へ返還され池田家の所有となったが、明治17年（1884）には岡山県へ譲渡されて一般公開がはじまった。仮橋の跡には鶴見橋が架



第２図　後楽園と岡山城（1/8,000）

第３図　調査地位置図（1/3,000）

けられ、以後、北門が後楽園の玄関口としての役割を担うこととなる。その一方で南門は、岡山城（烏城公園）から渡船で訪れる行楽客の出入り口として、引き続き維持されたようである（昭和29年に月見橋完工）。明治45年（1912）には岡電後楽園前駅が、大正４年（1915）には西大寺軽便鉄道の後楽園駅が開業し、岡山を代表する行楽地としてにぎわいを増していった。

しかし、昭和９年（1934）の室戸台風では唯心山の８合目まで浸水し、園内全域が泥土で覆われる被害を受けた。このため、昭和14年から後楽園の東側に放水路が掘削され、旭川左岸から独立した浮島となった。ところが昭和20年、復興したばかりの後楽園は戦禍に見舞われ、園内の主要亭舎が灰燼に帰すという甚大な損害を被った。その後、県民の強い熱意に支えられて復元工事が行なわれた結果、昭和27年には特別名勝の指定を受け、昭和42年にようやくかつての景観を取り戻すことができた。

昭和62年に岡山城付設の庭園として史跡に指定されると歴史遺産としての価値が見直されるようになり、花交の池の改修工事を契機として平成20年には保存管理計画書が策定された。今後、史跡としての整備が進めば、文化財庭園としての魅力をより多くの来訪者に伝えられるものと期待される。

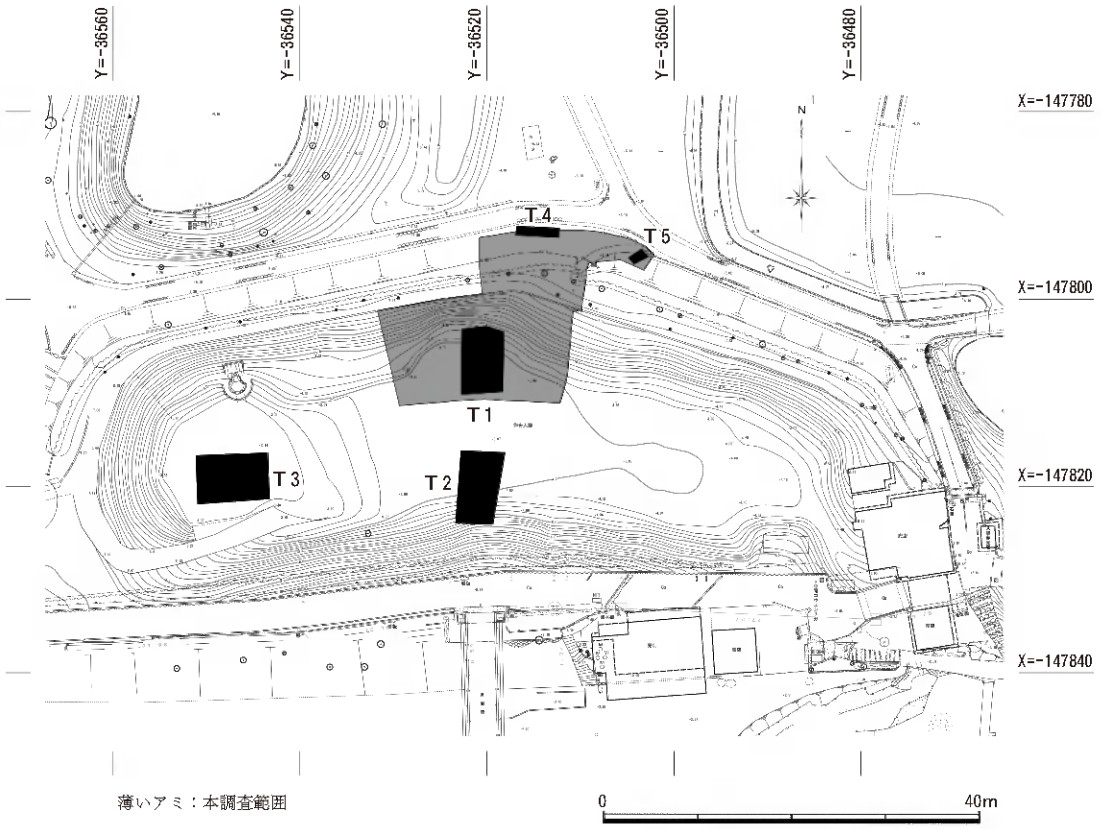
第２節　調査の経過

１　確認調査

岡山県では、保存管理計画及び整備計画に基づき、岡山後楽園魅力向上事業として、４か年計画で亭舎や景石・曲水等の保全改修を進めることとした。岡山藩主の後楽園への入り口でありながら、現在は半ば埋没している御舟入については整備顕彰することを計画したが、遺構の表示等が可能であるかどうか不明であったため、岡山後楽園を所管する都市計画課と文化財課で協議を行い、平成23年６月に確認調査（Ｔ１～３）を実施することとした。

Ｔ１は８×４ｍの範囲で設定し、地表下1.5～3.0ｍで石段を確認した。検出した石段は７段で、さらに上に続く可能性が推測できた。この石段は絵図との位置関係から雁木の一部と思われ、各段の規模は幅約50㎝、高さ約30㎝であることが判明した。この石段は黄褐色微砂（第５図11層）により埋まっており、さらにその上にも複数の堆積層が確認できた。堆積層の上部には、後楽園外周散歩道の造成土（第５図５層）が認められた。散歩道の造成工事は大正11年（1922）に実施されており、その頃には雁木は完全に視認できない状況にあったと判明した。

Ｔ２は後楽園外周の散歩道の直下に設定した調査区で、雁木対岸の護岸石垣の確認を目的として、８×４ｍの範囲で設定した。表土下15～40㎝で散歩道の造成土（第５図２～７層）が確認できた。造成土は灰黄褐色微砂（第５図８層）の直上に施されていた。この砂層は雁木の直上の堆積層と対応す



第４図　御舟入跡調査区配置図（1/800）

ることから、その直下に護岸石垣の存在が予測されたが、調査区内での検出には至らなかった。

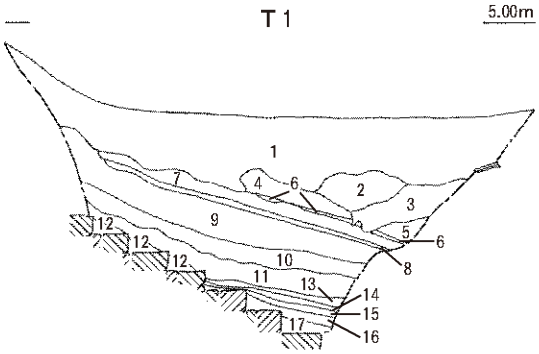
Ｔ３は御舟入跡の埋没状況を確認するために８×５ｍの範囲で設定した。Ｔ１で確認した雁木直上の堆積層と同様の層（第５図７層）が確認でき、この層が御舟入全体に堆積する可能性が判明した。

以上の結果から、雁木が良好に遺存することが判明したが、さらに園内側での通路の状況を把握するため、翌年１月に確認調査（Ｔ４・５）を追加実施した。

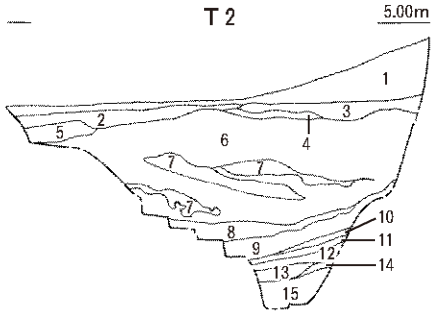
Ｔ４は「享保の絵図」を参考に通路の位置を想定し、4.7×1.1ｍの範囲で設定した。ここでは、基盤となる砂層（第６図６層）の上にシルト質土やシルト質土混じり土による盛土（第６図２～５層）を確認した。この盛土中から17世紀中頃の磁器片が出土したが、盛土が施された時期はこの時点では不明であった。また基盤の砂層を掘り込む土坑を２基検出したが、その詳細な時期や性格は明らかではない。なお、通路に関連する遺構は確認できなかった。

Ｔ５は園路際に残る石列の性格や時期を確認することを目的に、1.5×１ｍの範囲で設定した。石列は背後がセメントで固められており、近・現代の構築物と判明した。

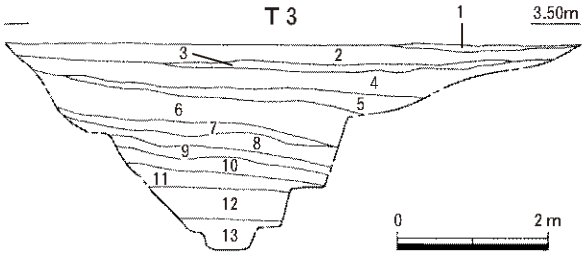
これらの成果を受けて、平成24年４月から御舟入の雁木を中心に発掘調査を実施し、あわせて今後



1　黒褐色（10YR3/1）土…昭和時代の堆積土＜～４層＞
2　灰白色（10YR7/1）シルト質土と灰黄褐色（10YR4/2）土
3　灰黄褐色（10YR5/2）土
（２層の粘質土や砂がブロック状に入る）
4　灰黄褐色（10YR6/2）土（炭含）
5　灰白色（10YR7/1）シルト質土…外周散歩道の盛土
6　褐灰色（10YR4/1）シルト質土…大正時代以降の堆積土＜～８層＞
7　にぶい黄橙色（10YR6/4）シルト質細砂と褐灰色
（10YR5/1）土の互層
8　にぶい黄橙色（10YR7/3）シルト質微砂
9　黒褐色（10YR3/2）土（細礫多含）…大正時代包含層
10　褐色（10YR4/4）シルト質微砂…大正時代盛土＜～11層＞
11　黄褐色（10YR5/6）シルト質微砂
12　褐色（10YR4/6）シルト質微砂…大正時代以前の堆積土＜～17層＞
13　灰黄褐色（10YR4/2）シルト質微砂
14　黄褐色（10YR5/6）シルト質微砂
15　褐色（10YR4/6）シルト質微砂
16　灰黄褐色（10YR4/2）シルト質土
17　褐灰色（10YR4/1）シルト質土



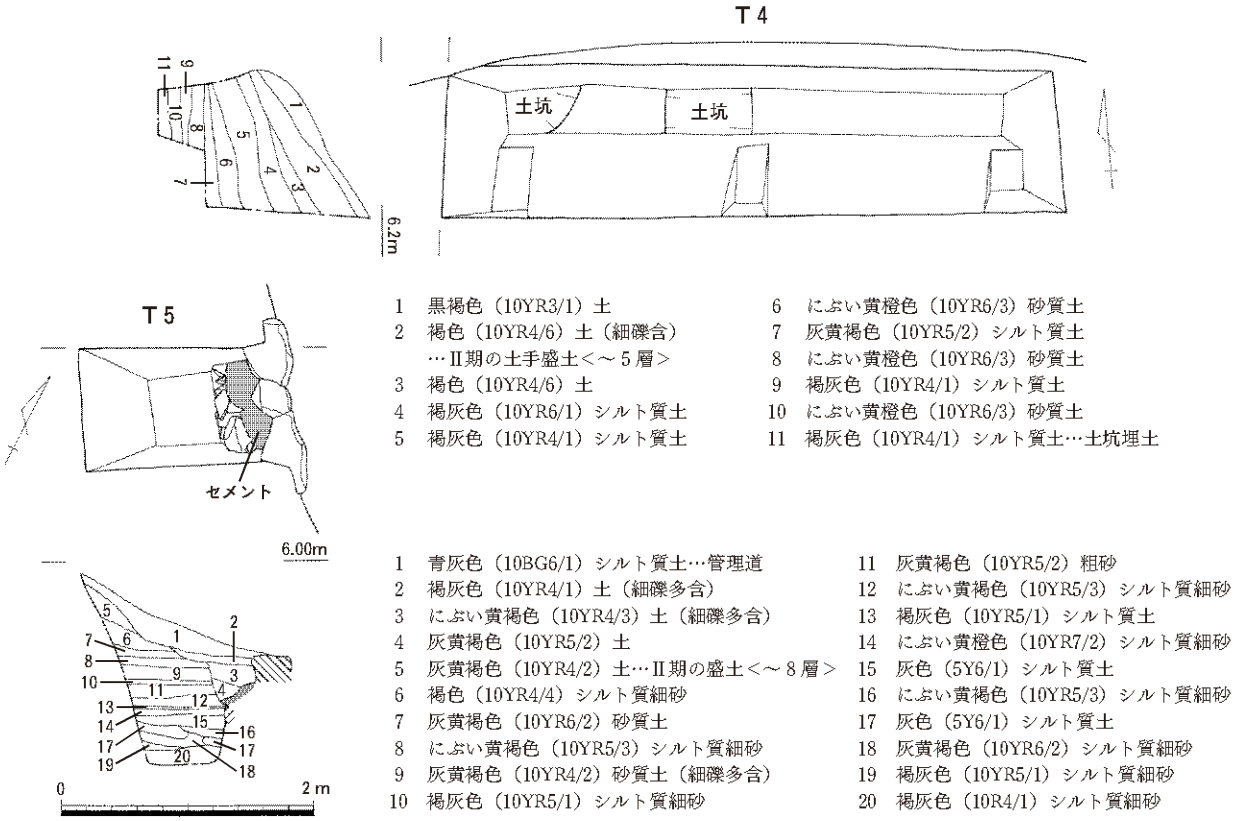
1　黒褐色（10YR3/1）シルト質微砂…昭和時代の堆積土
2　灰黄褐色（10YR4/2）シルト質微砂
…外周散歩道の盛土＜～７層＞
3　オリーブ褐色（2.5Y4/3）シルト質微砂
4　黄褐色（2.5Y5/3）シルト質微砂
5　灰黄褐色（10YR4/2）シルト質微砂〔６層ブロック含〕
6　褐灰色（10YR5/1）シルト質土
と黄色砂および粘質土ブロックの混合
7　黄褐色（10YR5/6）砂質土
8　灰黄褐色（10YR4/2）シルト質微砂…大正時代盛土
9　にぶい黄褐色（10YR4/3）シルト質微砂
…大正時代以前の堆積土＜～15層＞
10　灰黄褐色（10YR4/2）シルト質微砂
11　黄褐色（10YR5/6）シルト質微砂
12　暗褐色（10YR3/3）シルト質微砂
13　褐灰色（10YR5/1）シルト質微砂
14　灰黄褐色（10YR4/2）シルト質微砂
15　褐灰色（10YR5/1）シルト質微砂



1　黄橙色（10YR8/8）シルト質粗砂
…昭和時代の堆積土＜～６層＞
2　黒褐色（10YR3/1）土
3　灰黄褐色（10YR4/2）土
4　黒褐色（10YR3/2）土
5　褐灰色（10YR4/1）土
6　黒色（10YR2/1）土
7　にぶい黄褐色（10YR4/3）土
…大正時代以前の堆積土＜～13層＞
8　暗青灰色（5BG4/1）シルト質土
9　にぶい黄橙色（10YR7/2）
シルト質細砂
10　黒色（10YR2/1）土
11　暗赤褐色（2.5YR3/6）土
12　緑灰色（10GY5/1）シルト質土
13　緑灰色（10GY5/1）シルト質土
（Mn含）

第５図　御舟入跡トレンチ１～３土層断面図（1/100）

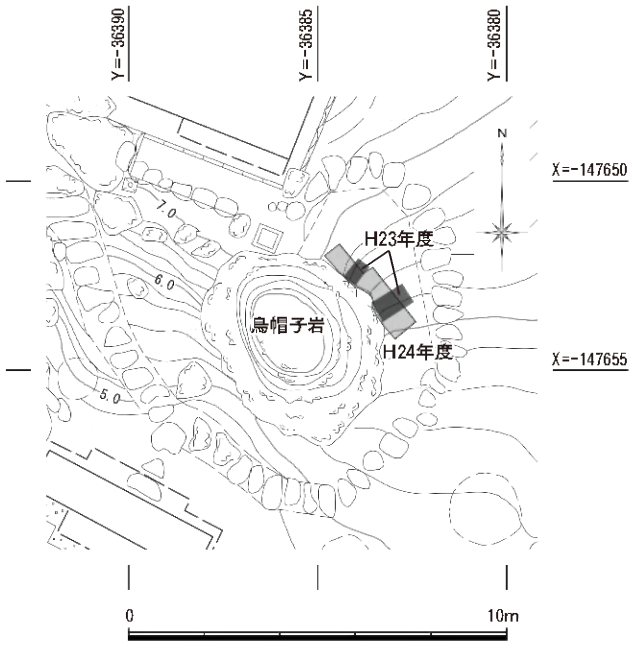
整備改修が予定されている曲水および花交の池について、現在の護岸の背後に江戸時代の遺構が存在するかどうかを確認するための調査を実施することとした。　（宇垣・上栫）



1　黒褐色（10YR3/1）土
2　褐色（10YR4/6）土（細礫含）
　…Ⅱ期の土手盛土<～５層>
3　褐色（10YR4/6）土
4　褐灰色（10YR6/1）シルト質土
5　褐灰色（10YR4/1）シルト質土
6　にぶい黄橙色（10YR6/3）砂質土
7　灰黄褐色（10YR5/2）シルト質土
8　にぶい黄橙色（10YR6/3）砂質土
9　褐灰色（10YR4/1）シルト質土
10　にぶい黄橙色（10YR6/3）砂質土
11　褐灰色（10YR4/1）シルト質土…土坑埋土

1　青灰色（10BG6/1）シルト質土…管理道
2　褐灰色（10YR4/1）土（細礫多含）
3　にぶい黄褐色（10YR4/3）土（細礫多含）
4　灰黄褐色（10YR5/2）土
5　灰黄褐色（10YR4/2）土…Ⅱ期の盛土<～８層>
6　褐色（10YR4/4）シルト質細砂
7　灰黄褐色（10YR6/2）砂質土
8　にぶい黄褐色（10YR5/3）シルト質細砂
9　灰黄褐色（10YR4/2）砂質土（細礫多含）
10　褐灰色（10YR5/1）シルト質細砂
11　灰黄褐色（10YR5/2）粗砂
12　にぶい黄褐色（10YR5/3）シルト質細砂
13　褐灰色（10YR5/1）シルト質土
14　にぶい黄橙色（10YR7/2）シルト質細砂
15　灰色（5Y6/1）シルト質土
16　にぶい黄褐色（10YR5/3）シルト質細砂
17　灰色（5Y6/1）シルト質土
18　灰黄褐色（10YR6/2）シルト質細砂
19　褐灰色（10YR5/1）シルト質細砂
20　褐灰色（10R4/1）シルト質細砂

第６図　御舟入跡トレンチ４・５（1/60）



第７図　烏帽子岩トレンチ配置図（1/200）

烏帽子岩は、後楽園北東部の慈眼堂前に設置された花崗岩の巨岩である。規模は東西約4.5m、南北約5.5m、高さ約3.5mを測る。元禄10年（1697）頃に設置されたと考えられ、36個に分割された木製の雛形が現存している。近年、烏帽子岩は風化や損傷が進み、一部に崩落の危険が生じたため補修方法の検討を目的に、平成24年１月25・26日、７月２日に確認調査を行った。北東裾部に設定した調査区では、上部に流入土等が堆積し、下部で固く締まった盛土を検出した。最下段部の石は盛土の上に直接据え置かれ、根石等は認められなかった。最下段部の石は、木製雛形では長大な一石で表現されているが、実際には石が複数に分かれ、木製雛形どおりにはなっていないことが判明した。　（石田）

２　発掘調査及び報告書作成

確認調査によって雁木が良好に遺存することが判明したため、その全容を明らかにするとともに護岸石垣や御成御門、通路などを把握することを目的として発掘調査を実施した。調査範囲は雁木を検出したＴ１を中心とする410㎡である。雁木や護岸石垣は地表下３～４ｍに位置するため重機を利用して掘り下げたが、多量の排土や湧水に悩まされた。御成御門や通路が想定される北側では、樹木や擁壁を除去した後にトレンチを設定して掘削したが、上層で幕末期のもの（Ⅱ期）と見られる通路が見つかった上、防水上の理由により標高６ｍ以下の掘り下げが困難となったことから、雁木に繋がる通路や御成御門の平面的追求は断念せざるを得なかった。これにより、南側は雁木の機能時、北側は雁木の機能停止後という異なる時期の遺構面で発掘を停止することとなった。調査終了後は、トレンチ等を埋め戻すとともに、雁木や縁石を土嚢で保護して整備工事に備えた。こうした調査成果は、６月16・17日に現地説明会、18～22日に現地公開を行い、合計1,918名の参加を得ている。

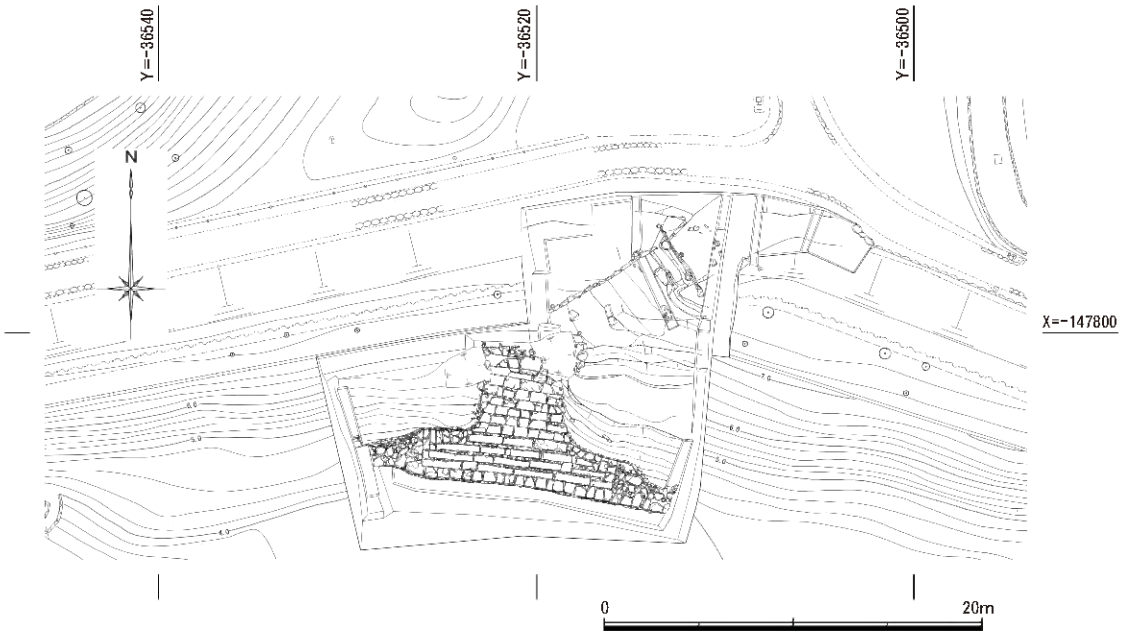
報告書の作成は、小嶋が図面・写真の整理、小林が編集を担当し、翌年３月末に完了した。（小林）

国指定史跡の現状変更許可申請（法第125条）

番号	申請文書番号 日　付	種類及び名称	所　在　地	目　的	申　請　者	期　間	許可条件	許可文書番号 日　付
1	都計 第33号 H23.4.20	特別名勝 岡山後楽園 史跡 岡山城跡	岡山市北区後楽園1-5	発掘調査及び精算機設置	岡山県知事 石井正弘	許可日～ H24.3.31	・実施に当たっては、岡山県教育委員会の指導を受けること。	23受庁財 第４号の124 H23.5.20
2	都計 第384号 H23.11.18	特別名勝 岡山後楽園 史跡 岡山城跡	岡山市北区後楽園1-5	発掘調査及び庭園整備	岡山県知事 石井正弘	許可日～ H24.7.30	・工事に際しては、岡山県教育委員会職員の立会いを求めること。 ・重要な遺構などが発見された場合は、設計変更等により、その保存を図ること。	23受庁財 第４号の1470 H23.12.9

埋蔵文化財発見通知（法第100条）

番号	岡山県文書 番号　日付	物件名	出土地	出土年月日	発見者	土地所有者	現保管場所
1	教文埋 第474号 H24.7.11	陶磁器・瓦　整理箱１箱 鉄器　整理箱１箱 計　整理箱２箱	岡山市北区後楽園1-5 特別名勝岡山後楽園・史跡岡山城跡	H24.4.16 ～ H24.7.11	岡山県教育委員会 教育長　竹井千庫	岡山県知事 石井正弘	岡山県古代吉備文化財センター



第８図　御舟入跡調査範囲図（1/400）

3　日誌抄

平成23年

6月１日（水）　調査資材搬入。御舟入跡確認調査開始（Ｔ１～３）。
6月７日（火）　専門委員による現地指導。
6月10日（金）　特別名勝岡山後楽園保存管理委員による現地指導。
6月19日（日）　現地説明会開催。
6月21日（火）　調査資材撤収。確認調査終了。

平成24年

1月23日（月）　調査資材搬入。御舟入跡確認調査開始（Ｔ４・５）。
1月25日（水）　烏帽子岩確認調査（～26日）。
1月30日（月）　調査資材撤収。確認調査終了。
4月２日（月）　事業開始。
4月16日（月）　調査資材搬入。御舟入跡発掘調査開始。
6月４日（月）　専門委員による現地指導。
6月５日（火）　特別名勝岡山後楽園保存管理委員による現地指導。
6月16日（土）　現地説明会開催（～17日）。
6月18日（月）　発掘調査現場公開（～22日）。
6月20日（水）　花交の池確認調査開始。
7月２日（月）　烏帽子岩確認調査。
7月６日（金）　花交の池確認調査終了。
7月11日（水）　御舟入跡発掘調査終了。調査資材撤収。
7月12日（木）　報告書作成作業開始。

平成25年

3月29日（金）　報告書作成作業終了。事業終了。

4　調査の体制

平成23年度

岡山県教育委員会

教育長　竹井　千庫

岡山県教育庁

教育次長　阿部　淳二

文化財課

課長　村木　生久
参事　光永　真一
総括副参事（埋蔵文化財班長）　宇垣　匡雅
主任　石田　爲成
主任　一色　武

岡山県古代吉備文化財センター

所長　平井　泰男
次長（総務課長事務取扱）　片山　淳司
参事　中野　雅美

〈総務課〉

総括副参事（総務班長）　上田　利弘
主任　植木寿美子
主任　行守　智和

〈調査第一課〉

課長　江見　正己
総括主幹（第一班長）　柴田　英樹
主任　上栫　武（調査担当）
主任（文化財課本務）　石田　爲成（調査担当）

平成24年度

岡山県教育委員会

教育長　竹井　千庫

岡山県教育庁

教育次長　松尾　茂樹

文化財課

課長　光永　真一
参事　嶋田健一郎
総括副参事（埋蔵文化財班長）　宇垣　匡雅
主任　石田　爲成
主任　河野　但彰

岡山県古代吉備文化財センター

所長　平井　泰男
次長（総務課長事務取扱）　大崎　智浩
総括参事（調査第一課長事務取扱）　中野　雅美

〈総務課〉

総括主幹（総務班長）　岡部　一
主任　行守　智和
主任　岡村　涼平

〈調査第一課〉

総括副参事（第一班長）　柴田　英樹
主任（文化財課本務）　石田　爲成（調査担当）

〈調査第三課〉

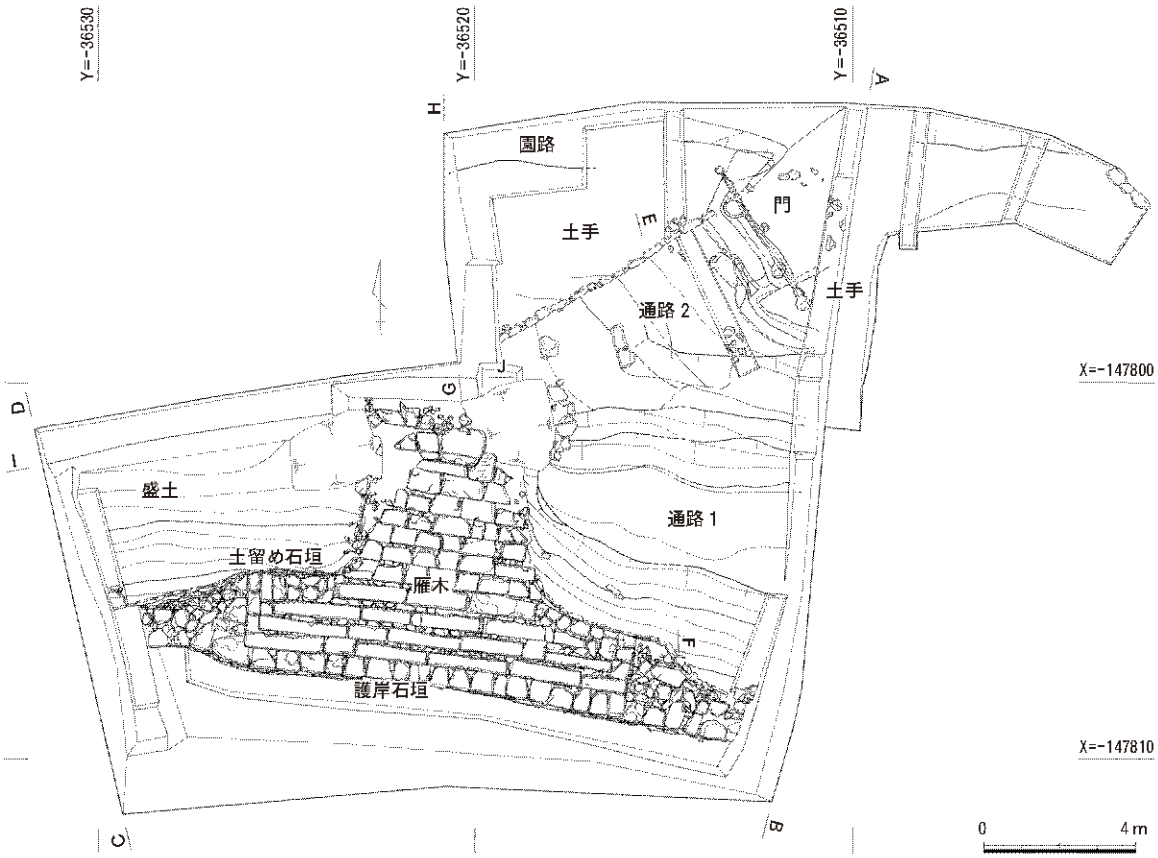
課長　亀山　行雄
総括主任（第二班長）　小林　利晴（調査・報告書担当）
主任　小嶋　善邦（調査・報告書担当）

第２章　発掘調査の成果

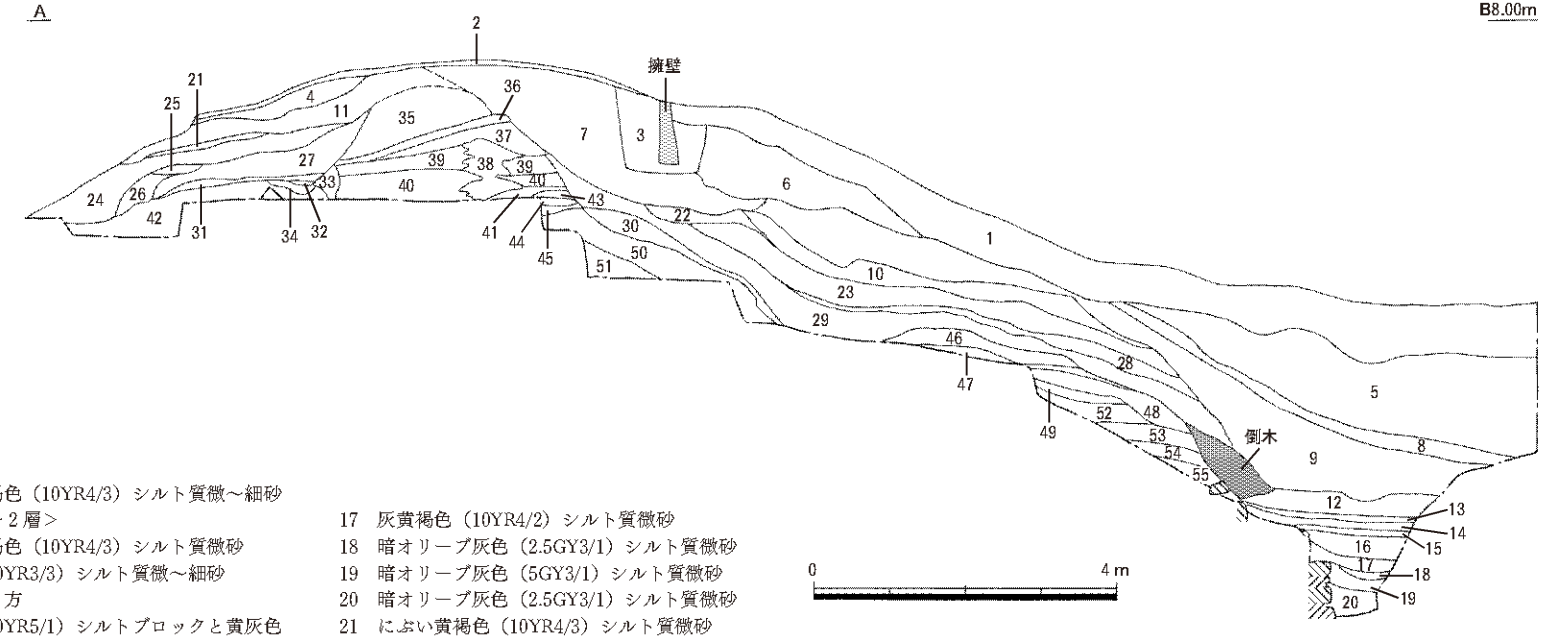
第１節　御舟入跡の調査

１　概要

検出した遺構は、その層位によって大きく３時期に分けられる。Ⅰ期は御舟入が整備され機能していた段階（江戸時代中期）で、舟溜まりを囲む護岸石垣やその上に築かれた13段の雁木、斜面を区切る土留め石垣のほか、川岸と園内を結ぶ道（通路１）や御舟入と園内を結ぶ道（通路２）がある。Ⅱ期は御舟入と園内の間に高い土手が築かれた段階（江戸時代後期）で、通路１はより高い位置に改修されたほか、通路２では土手の裾に配した縁石や門と見られる遺構を検出した。ただし、この段階に雁木が引き続いて機能していたかどうかは明らかでない。Ⅲ期は御舟入が埋没して機能を失い、その斜面には廃棄物が捨てられる段階（明治時代）である。通路１は土手の頂部近くに付け替えられ、これと接続する通路２は不明瞭に土手を上っていく。Ⅳ期は、御舟入側にコンクリートの擁壁を設けて土手を拡幅する段階で、桜の植栽を目的として行われたと考えれば昭和時代の所産であろう。また通路２は、園内から土手に上る管理道として残ったが、近年の植栽に際して埋められている。（小林）

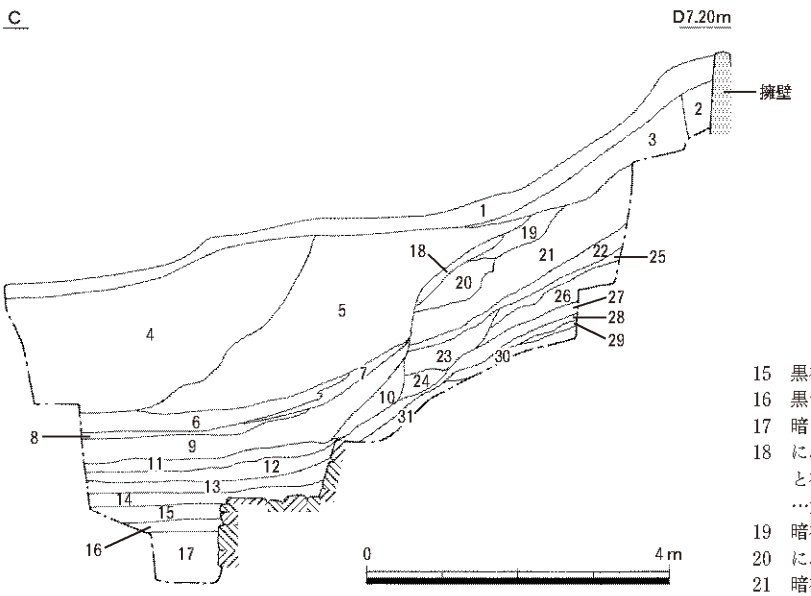


第９図　御舟入跡遺構配置図（1/200）



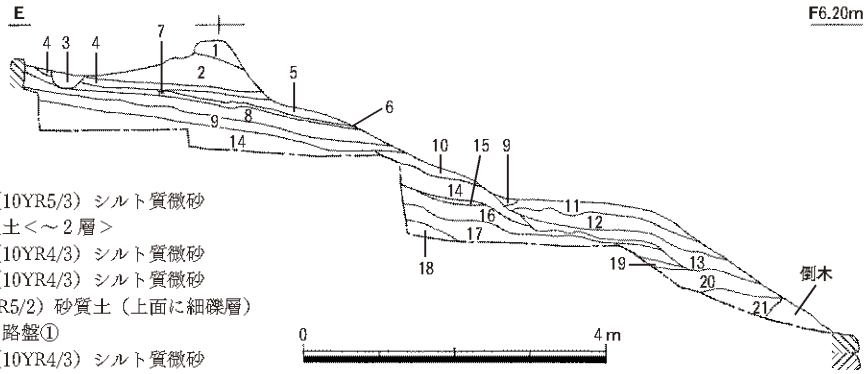
1　にぶい黄褐色（10YR4/3）シルト質微～細砂
…表土＜～２層＞
2　にぶい黄褐色（10YR4/3）シルト質微砂
3　暗褐色（10YR3/3）シルト質微～細砂
…擁壁掘り方
4　褐灰色（10YR5/1）シルトブロックと黄灰色（2.5Y4/1）シルトブロック…現在の管理道
5　暗灰黄色（2.5Y5/2）シルトブロックとにぶい黄褐色（10YR4/3）微～細砂ブロック
…大正時代以降の堆積土＜～８層＞
6　褐色（10YR4/4）シルト質微砂
7　暗褐色（10YR3/3）シルト質微～細砂
8　にぶい黄褐色（10YR5/3）砂質土
9　黒褐色（10YR3/2）シルト質細砂
…大正時代包含層
10　にぶい黄褐色（10YR5/4）シルト質細砂
…大正時代盛土＜～11層＞
11　褐色（10YR4/4）シルト質細砂
12　にぶい黄褐色（10YR4/3）砂質土
13　にぶい黄褐色（10YR4/3）シルト質微砂
…水成堆積土＜～20層＞
14　灰黄褐色（10YR4/2）シルト質微砂
15　にぶい黄褐色（10YR4/3）シルト質細砂
16　褐灰色（10YR4/1）シルト質細砂
17　灰黄褐色（10YR4/2）シルト質微砂
18　暗オリーブ灰色（2.5GY3/1）シルト質微砂
19　暗オリーブ灰色（5GY3/1）シルト質微砂
20　暗オリーブ灰色（2.5GY3/1）シルト質微砂
21　にぶい黄褐色（10YR4/3）シルト質微砂
…Ⅲ期の通路２路盤？
22　暗褐色（10YR3/4）シルト質微砂
…Ⅲ期の通路１路盤
23　褐色（10YR4/6）シルト質細砂…Ⅲ期の盛土
24　褐色（10YR4/6）シルト質細砂
…Ⅲ期の土手盛土＜～27層＞
25　にぶい黄褐色（10YR4/3）シルト質微砂
26　褐色（10YR4/6）シルト質細砂
27　褐色（10YR4/6）シルト質細砂（１～２㎝細礫多量）
28　にぶい黄褐色（10YR5/4）シルト質細砂
（細礫多含）…Ⅱ期の通路１路盤
29　褐色（10YR4/4）シルト質細砂
…Ⅱ期の盛土＜～30層＞
30　暗褐色（10YR3/3）シルト質細砂
31　褐色（10YR4/4）シルト質微砂（黄色土ブロック含）…Ⅱ期の通路２路盤
32　にぶい黄褐色（10YR4/3）シルト質微砂
…Ⅱ期の通路２路盤地業＜～34層＞
33　褐色（10YR4/4）シルト質細砂
34　褐色（10YR4/4）シルト質細砂
35　褐色（10YR4/4）シルト質細砂
…Ⅱ期の土手盛土＜～37層＞
36　褐色（10YR4/4）シルト質微砂
37　褐色（10YR4/4）シルト質細砂
38　黄褐色（10YR5/6）シルト質微砂
（やや硬質）…門付近の盛土
39　暗褐色（10YR3/4）シルト質細砂
…Ⅱ期の土手盛土＜～41層＞
40　にぶい黄褐色（10YR4/3）シルト質微砂
41　褐色（10YR4/4）シルト質微砂
42　褐色（10YR4/4）シルト質微砂（灰色ブロック含）
…Ⅱ期の通路２造成土
43　にぶい黄褐色（10YR5/4）シルト質微砂
…Ⅰ期の土手盛土＜～45層＞
44　褐色（10YR4/4）シルト質細砂
45　黄褐色（10YR5/6）シルト質微砂
46　褐色（10YR4/4）シルト質細砂（１～５㎝細礫多含）…Ⅰ期の通路１路盤①
47　にぶい黄褐色（10YR5/4）砂質土
…Ⅰ期の盛土＜～48層＞
48　褐色（10YR4/4）砂質土
49　褐色（10YR4/4）砂質土（１～４㎝細礫多含）
…Ⅰ期の通路１路盤②
50　にぶい黄褐色（10YR4/3）シルト質微砂
…Ⅰ期の盛土＜～55層＞
51　褐色（10YR4/4）シルト質微砂
52　褐色（10YR4/4）シルト質微砂
53　褐色（10YR4/4）シルト質細砂
54　褐色（10YR4/4）砂質土
55　褐色（10YR4/6）シルト質細砂

第10図　調査区東壁土層断面図（1/100）



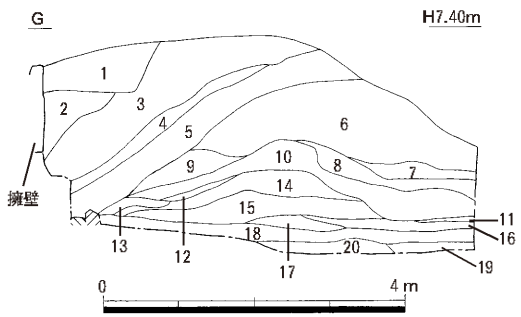
1　にぶい黄褐色（10YR4/3）シルト質微～細砂…表土
2　暗褐色（10YR3/3）シルト質微～細砂…擁壁掘り方
3　褐色（10YR4/4）シルト質微砂…大正時代以降の堆積土＜～10層＞
4　暗灰黄色（2.5Y5/2）シルトブロックとにぶい黄褐色（10YR4/3）シルト質微～細砂ブロック
5　にぶい黄褐色（10YR4/3）シルト質微砂
6　暗褐色（10YR3/3）シルト質微砂
7　にぶい黄褐色（10YR4/3）細砂と褐灰色（10YR4/1）シルトの互層
8　黒褐色（10YR3/2）シルト質土（２㎝細礫含）
9　黄灰色（2.5Y5/1）シルト質微砂
10　暗褐色（10YR3/4）シルト質微～細砂
11　褐色（10YR4/4）シルト質細～微砂…水成堆積土＜～17層＞
12　暗灰黄色（2.5Y4/2）シルト質～微砂
13　黄灰色（2.5Y4/1）シルト質土
14　黒褐色（2.5Y3/2）シルト質土
15　黒褐色（2.5Y3/1）シルト質土
16　黒色（2.5GY2/1）シルト質土
17　暗オリーブ灰色（2.5GY3/1）シルト質土
18　にぶい黄褐色（10YR4/3）シルト質細砂と褐灰色（10YR4/1）シルト質土の互層…大正時代盛土＜～21層＞
19　暗褐色（10YR3/3）シルト質土
20　にぶい黄褐色（10YR4/3）シルト質細砂
21　暗褐色（10YR3/4）シルト質細砂
22　にぶい黄褐色（10YR4/3）シルト質微砂…Ⅲ期の盛土＜～24層＞
23　暗褐色（10YR3/3）シルト質微砂
24　褐色（10YR4/4）シルト質微～細砂
25　にぶい黄褐色（10YR4/3）シルト質微砂…Ⅱ期の盛土＜～26層＞
26　にぶい黄褐色（10YR4/3）砂質土
27　褐色（10YR4/4）シルト質微～細砂…Ⅰ期の盛土＜～31層＞
28　褐色（10YR4/4）シルト質微～細砂
29　にぶい黄褐色（10YR4/3）シルト質細砂
30　にぶい黄褐色（10YR4/3）シルト質微砂
31　褐色（10YR4/4）シルト質微砂

第11図　調査区西壁南側土層断面図（1/100）



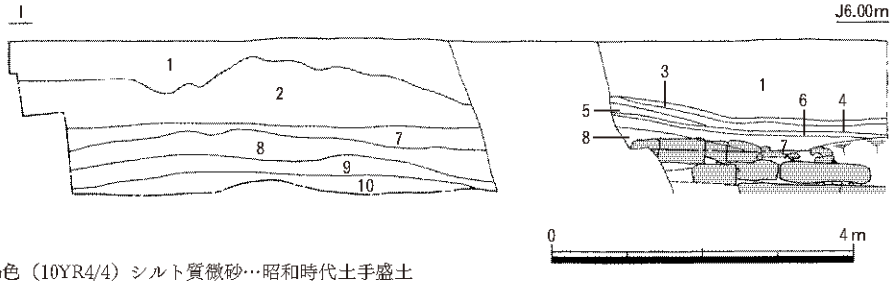
1　にぶい黄褐色（10YR5/3）シルト質微砂…Ⅲ期の土手盛土＜～２層＞
2　にぶい黄褐色（10YR4/3）シルト質微砂
3　にぶい黄褐色（10YR4/3）シルト質微砂
4　灰黄褐色（10YR5/2）砂質土（上面に細礫層）…Ⅱ期の通路２路盤①
5　にぶい黄褐色（10YR4/3）シルト質微砂
6　褐色（10YR4/4）砂質土（上面に細礫層）…Ⅱ期の通路２路盤②
7　褐色（10YR4/4）砂質土
8　褐色（10YR4/4）シルト質微砂…Ⅱ期の通路２造成土＜～９層＞
9　にぶい黄褐色（10YR4/3）シルト質微砂（黄色ブロック含）
10　にぶい黄褐色（10YR5/4）シルト質細砂…Ⅱ期の盛土
11　にぶい黄褐色（10YR4/3）シルト質微砂と細礫（径１～４㎝大）層…Ⅰ期の通路１路盤①
12　にぶい黄褐色（10YR5/3）砂質土…Ⅰ期の通路１造成土
13　褐色（10YR4/4）シルト質微砂と細礫（径２～５㎝）層…Ⅰ期の通路１路盤②
14　褐色（10YR4/4）シルト質細砂…Ⅰ期の通路２路盤
15　にぶい黄褐色（10YR4/3）シルト質細砂…Ⅰ期の盛土＜～18層＞
16　褐色（10YR4/4）シルト質細砂
17　褐色（10YR4/6）砂質土
18　褐色（10YR4/4）砂質土
19　にぶい黄橙色（10YR6/3）砂質土と細礫層…通路１路盤？
20　にぶい黄褐色（10YR5/4）シルト質細砂…Ⅰ期の盛土＜～21層＞
21　にぶい黄褐色（10YR5/4）シルト質微砂

第12図　中央トレンチ土層断面図（1/100）



1　にぶい黄褐色（10YR4/3）シルト質微砂
…擁壁掘り方＜～２層＞
2　褐色（10YR4/4）シルト質微砂（細礫含）
3　褐色（10YR4/4）シルト質微砂
…昭和時代土手盛土
4　黒褐色（10YR3/2）シルト質微砂
…大正時代包含層
5　にぶい黄褐色（10YR5/4）シルト質微砂
…大正時代土手盛土
6　にぶい黄褐色（10YR5/4）シルト質微砂
（５層より硬質）…Ⅱ・Ⅲ期の土手盛土
＜～10層＞
7　にぶい黄褐色（10YR4/3）シルト質微砂
8　にぶい黄褐色（10YR5/3）シルト質微砂
9　にぶい黄褐色（10YR5/4）シルト質微砂
10　にぶい黄褐色（10YR4/3）シルト質微砂
11　褐色（10YR4/4）砂質土（硬質）…Ⅰ期の園路
12　にぶい黄褐色（10YR4/3）シルト質細砂
…Ⅰ期の土手盛土＜～15層＞
13　褐色（10YR4/4）シルト質細砂
14　灰黄褐色（10YR4/2）シルト質微砂
15　黄褐色（10YR5/6）砂質土
16　暗褐色（10YR3/3）シルト質微砂
17　にぶい黄褐色（10YR4/3）シルト質微砂
18　にぶい黄褐色（10YR4/3）シルト質細砂
19　暗褐色（10YR3/3）シルト質微砂
20　にぶい黄褐色（10YR4/3）砂質土

第13図　調査区西壁北側土層断面図（1/100）



アミ：雁木見通し

1　褐色（10YR4/4）シルト質微砂…昭和時代土手盛土
2　暗褐色（10YR3/4）シルト質微砂…大正時代土手盛土＜～５層＞
3　にぶい黄褐色（10YR4/3）シルト質微砂
4　暗褐色（10YR3/4）シルト質微砂（５㎝細礫含）
5　褐色（10YR4/4）シルト質粗砂
6　にぶい黄褐色（10YR4/3）シルト質土
…Ⅲ期の盛土＜～７層＞
7　にぶい黄褐色（10YR4/3）シルト質微砂
8　にぶい黄褐色（10YR4/3）シルト質細砂
…Ⅱ期の盛土＜～９層＞
9　にぶい黄褐色（10YR4/3）砂質土
10　褐色（10YR4/4）シルト質細砂…Ⅰ期の盛土

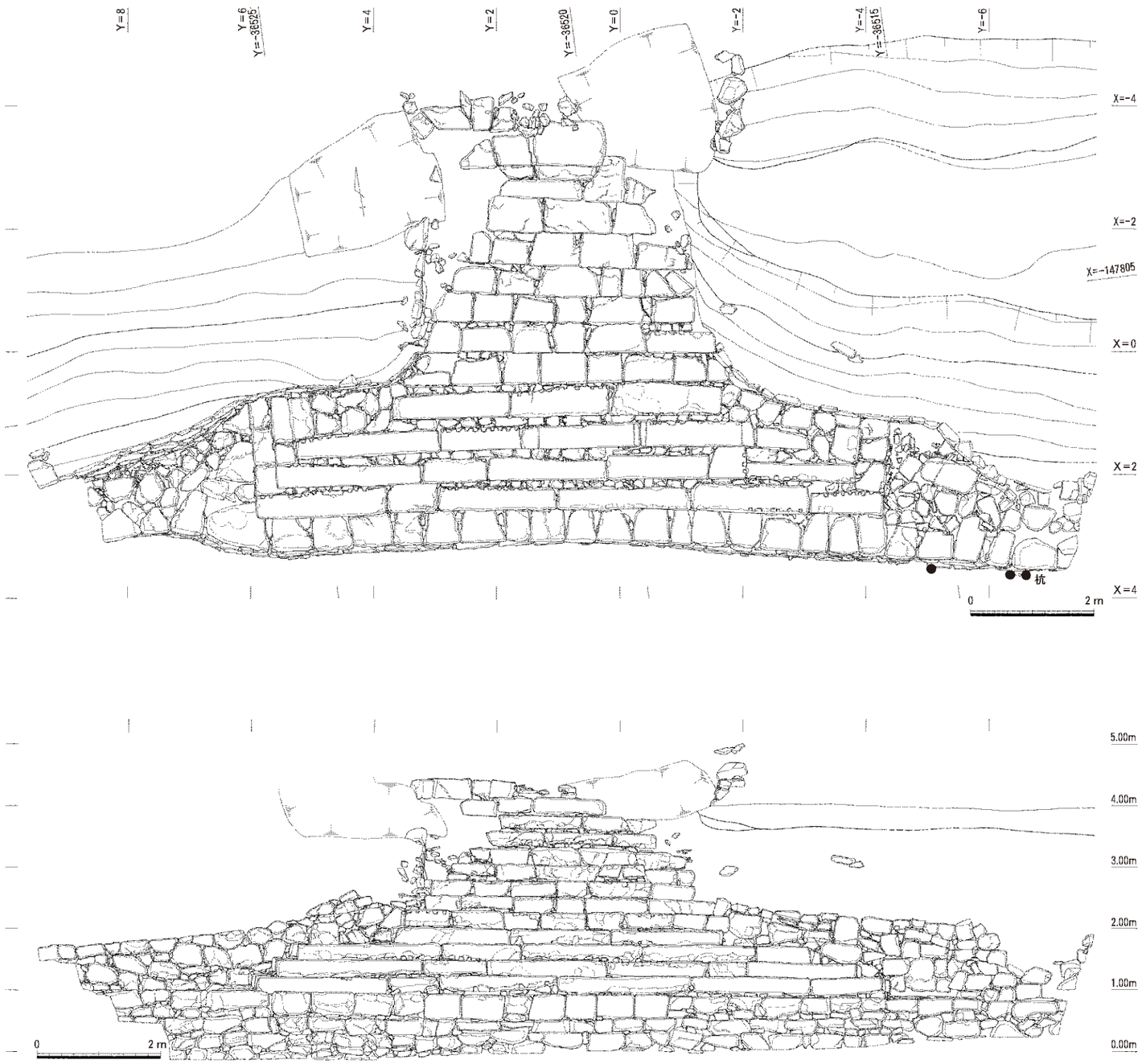
第14図　調査区北壁土層断面図（1/100）

２　遺構・遺物

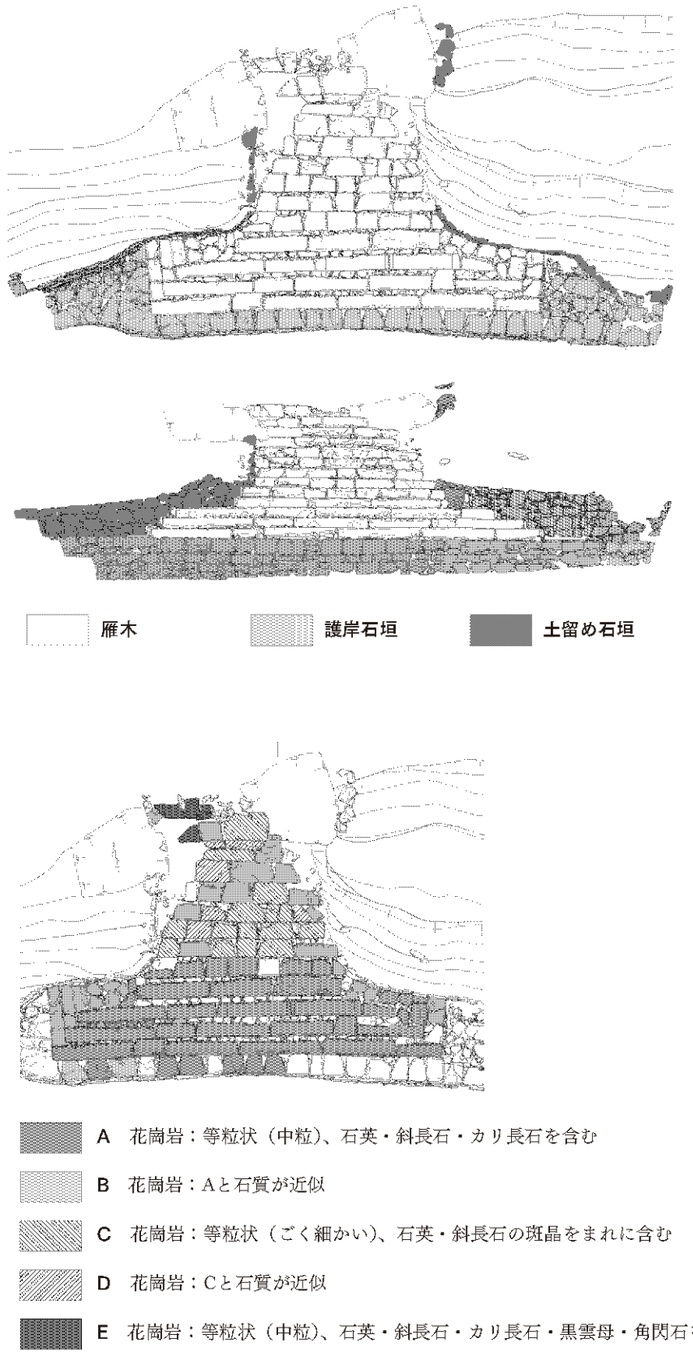
（１）Ⅰ期の遺構

護岸石垣（第９・15図、巻頭図版１、図版１・５）

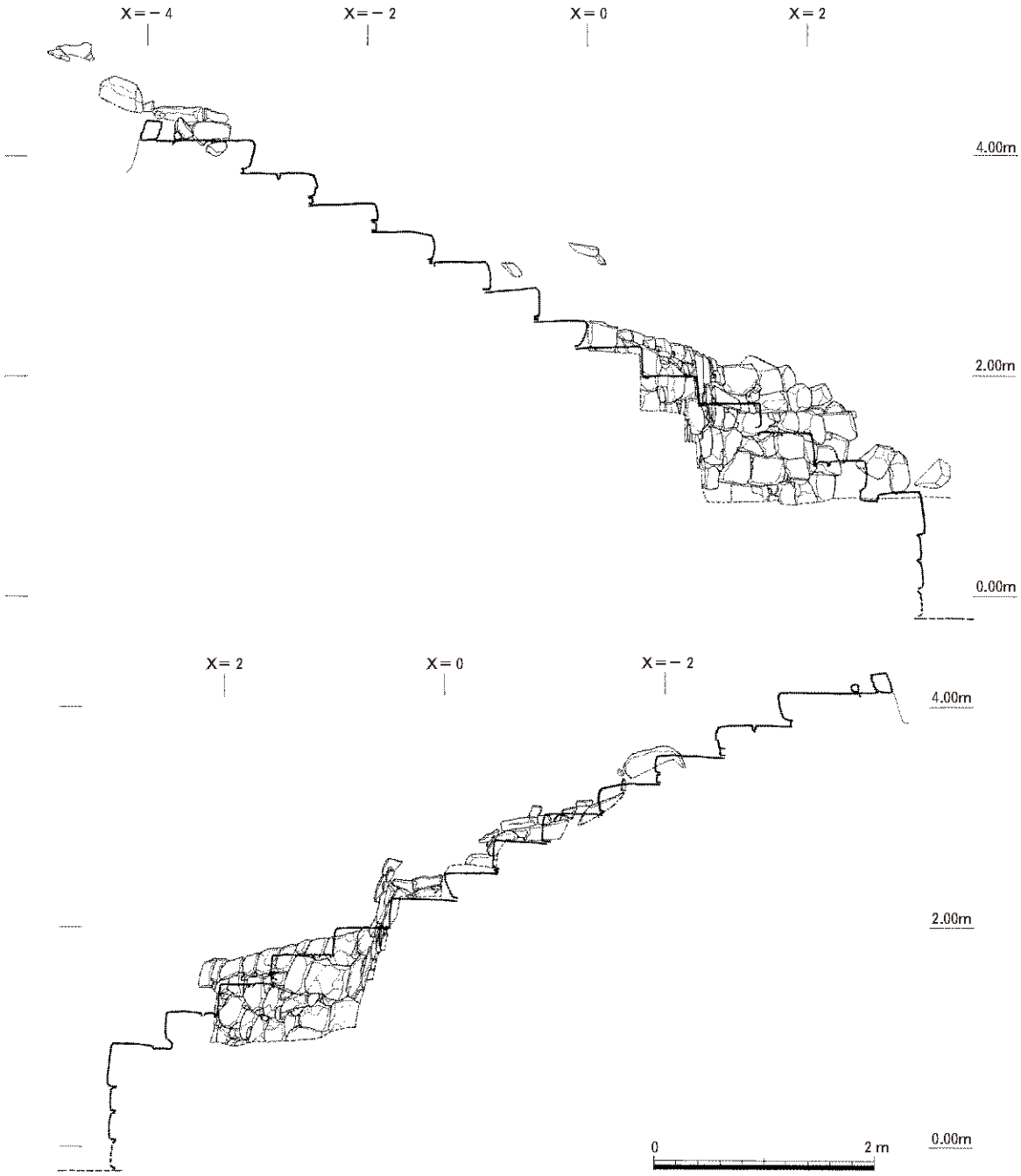
舟溜まりを囲う石垣で、地表下約３ｍから検出した。調査区を東南東－西北西に横切っており、検出長は15.7ｍである。長さ20～30㎝、高さ15～20㎝の割石・転石をほぼ垂直に４段積んでおり、高さは約1.2ｍを測る。上端の標高は西側が約1.0ｍ、東側が約0.8ｍであり、東に向けてわずかに下がっている。３段と４段の間に横目地が走り、その上下で壁面が不揃いとなっていることから、改修が行われたかもしれない。東側は石垣側からの湧水が激しく根石まで検出できなかったが、西側では砂礫の上に根石が直接据えられており、胴木等は確認されなかった。石垣の上端には、長さ約60㎝、幅40～70㎝、厚さ約40㎝の切石が雁木の幅にあわせて使用され、その据え方も上面および南面が揃っていることから、見栄えを良くする意図をもったものであろう。上端から土留め石垣との間には拳大から１ｍ大の石を敷き平坦面を作っており、通路としての役割もあったと考えられる。なお、雁木下段東側から60㎝および２ｍ東、護岸石垣の前面に接するような位置で、舫い杭の可能性も考えられる径約10㎝の丸木杭を３本検出した。（小嶋）



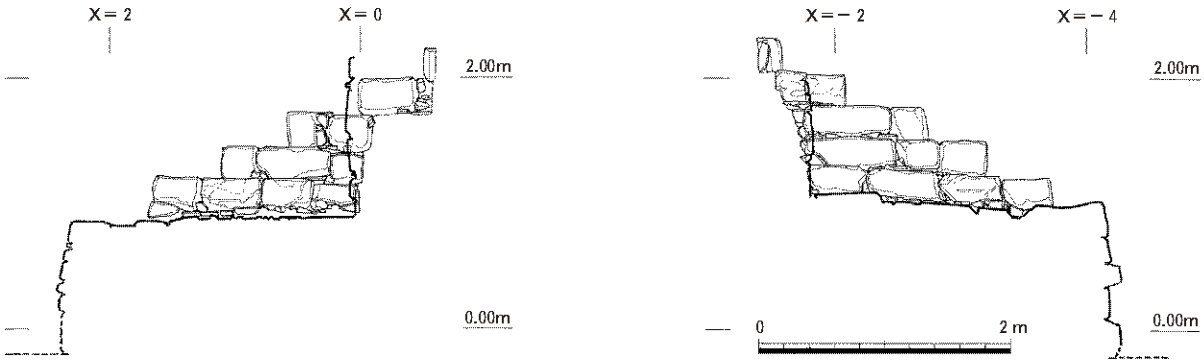
第15図　雁木等平・立面図（1/80）



第16図　石材区分図



第17図　土留め石垣東・西立面図（1/60）　※Y＝0.8からの見通し



第18図　雁木下段東・西立面図（1/60）

土留め石垣（第９・15・17図、巻頭図版１、図版１～４）

御舟入の斜面を区切る石垣で、護岸石垣から約2.4m北側で雁木と接続し、雁木方向へ約2.6m続いたのち、約4.4mの間隔を保ちながら北へ延びている。雁木接続部分から東西両側では「Ｓ」字状に屈曲しながら護岸石垣に接近するが、調査区の東西両端では護岸石垣からの平坦面幅が約１ｍを測る。雁木が東西両側から昇降可能な形態を呈していることから、この平坦面は通路としての役割もあったと思われる。雁木から東西に延びる石垣は、高さ約1.2mで割石をほぼ垂直に４段積んでいる。雁木の縁石も兼ねた長さ50㎝の石材を立てて並べている南北に延びる箇所について、東側北半はⅢ期の通路２東側に位置している３つの石材のうち南端の石材を取り除いた後に検出され、それより南半では石材およびその抜き取り痕も確認できなかった。雁木との間には空隙があり、その場所は礫を含む土のままである。石垣は雁木基底部から５段目の東端の石材上面に置かれているものを除き、雁木および護岸石垣平坦面背後に築かれており、雁木と同時に築造された可能性がある。（小嶋）

雁木（第９・15・17・18図、巻頭図版１、図版１～５）

舟溜まり北岸中央部に位置し、護岸石垣を取り込むように13段築かれている。ちなみに確認調査Ｔ１で検出した７段の石段は、雁木６段と護岸石垣の上端部であった。基底部から１段目が2.4m、４段目が50㎝土留め石垣から張り出すことで東西両方向から昇降可能な形態を呈する。高さ3.2m、奥行き7.3mを測り、各段とも幅50㎝前後、高さ30㎝前後であった。基底部から５段（下段）、６～12段東側（中段）、12段西端～13段（上段）で石材や構造に相違点が認められる。下段は、幅5.4～10.2mを測り、矢穴や粗ハツリ痕が明瞭に残存した花崗岩（中粒）が使用されている。雁木の各段は、１～３段が前面に長さ１～２ｍ、幅30～40㎝、高さ20～30㎝の方柱状に整形した延石材を裾えて背後に20㎝程度の石材を嵌め込んでいる。一方、４・５段はほぼ段幅の大きさの石を使用していた。下段部に用いられた延石の中には、両端部を幅20～30㎝、深さ２～３㎝ほどの段状に加工するものがあり、転用材とも考えられる。中段は、12段目東端が失われているものの平面台形に築かれていたと想定される。幅は６段目が土留め石垣とほぼ接し4.7m、12段目が2.6mである。石材は花崗岩（細粒）が使用され、その表面は平滑である。踏面はほぼ１石で構成されている。上段は、13段東側が攪乱により石材が失われ、間詰石のみが検出されている。石材は加工度の低い花崗岩（中粒）である。なお、西側攪乱部の東壁において、現雁木面より50㎝下から、南東方向に続いていくと思われる石材を確認した。石質は下段の花崗岩（中粒）に近似している。（小嶋）

通路１（第９・10・12図、図版７）

御舟入と川岸を結ぶ道で、雁木の東側から調査区東壁にかけて検出した。路面幅は約２ｍである。路面の標高は約3.9mで、造成土（第10図46層）には、２～５㎝大の円礫を多く含む。さらに下層に２面の細礫層（第10図49層－標高3.5m、第12図19層－標高3.1m）があり、２次の改修が行われた可能性を考えている。（小嶋）

通路２（第９・12・19図、図版６）

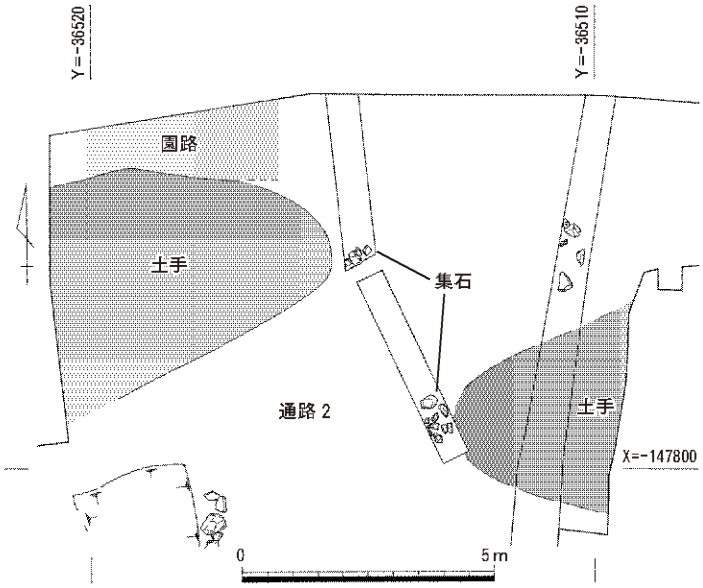
御舟入と園内を結ぶ道で、雁木上端から北東に延びる。Ⅱ期の通路と重複しているためトレンチで確認したにすぎないが、Ⅱ期の路面から30㎝下でその両端と対応する位置に集石を検出しており、これを縁石と想定して計測するとその幅は3.0mとなる。路面の標高は、雁木側で4.8m、トレンチ部分で5.4mを測り、その勾配は９°である。路面に細礫の敷設は見られない。（小林）

土手（第10・13・19図、図版８）

御舟入と園内の間に砂質土を60㎝にわたって盛り上げたもので、基底部の幅は4.2ｍを測る。「享保の絵図」には水除け藪の記載があり、竹などの植栽が行われた可能性がある。　（小林）

園路（第９・13・19図、図版７）

土手の北側で、東西3.6ｍ、南北1.5ｍにわたって検出した平坦な硬化面で、標高は4.9ｍ（現地表下90㎝）を測る。灰褐色を呈する砂質の土壌であり、園路もしくは何らかの構造物の一部と推定される。　（小林）



第19図　Ⅰ期の遺構（1/150）

（２）Ⅱ期の遺構

通路１（第10図）

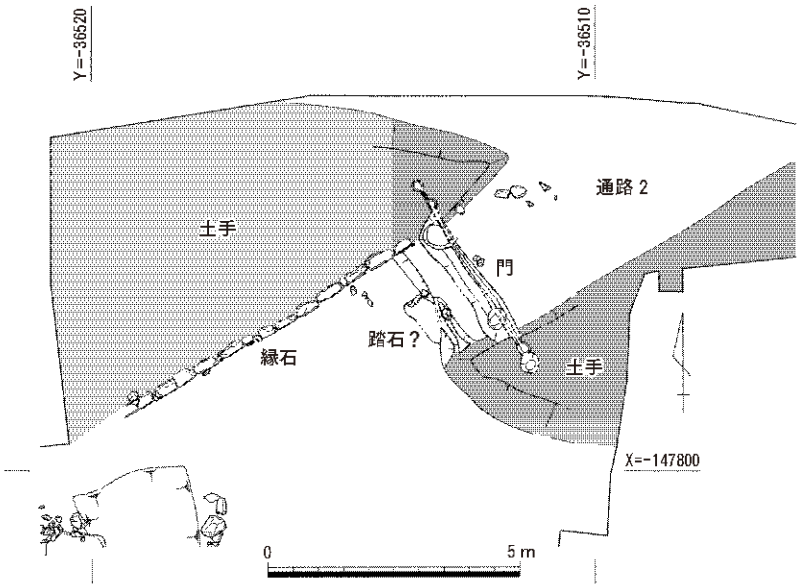
Ⅰ期の路面より30㎝ほど上層にあり、標高は4.2ｍである。御舟入内を東西方向に走る通路で、前時期とほぼ同箇所に存在する。路面幅は2.2ｍを測り、規模の上ではⅠ期の通路よりやや広くなる。造成土（第10図28層）には、前時期同様に２～４㎝の円礫を多く含む。　（小嶋）

通路２（第９・10・12・20～22図、巻頭図版１、図版６）

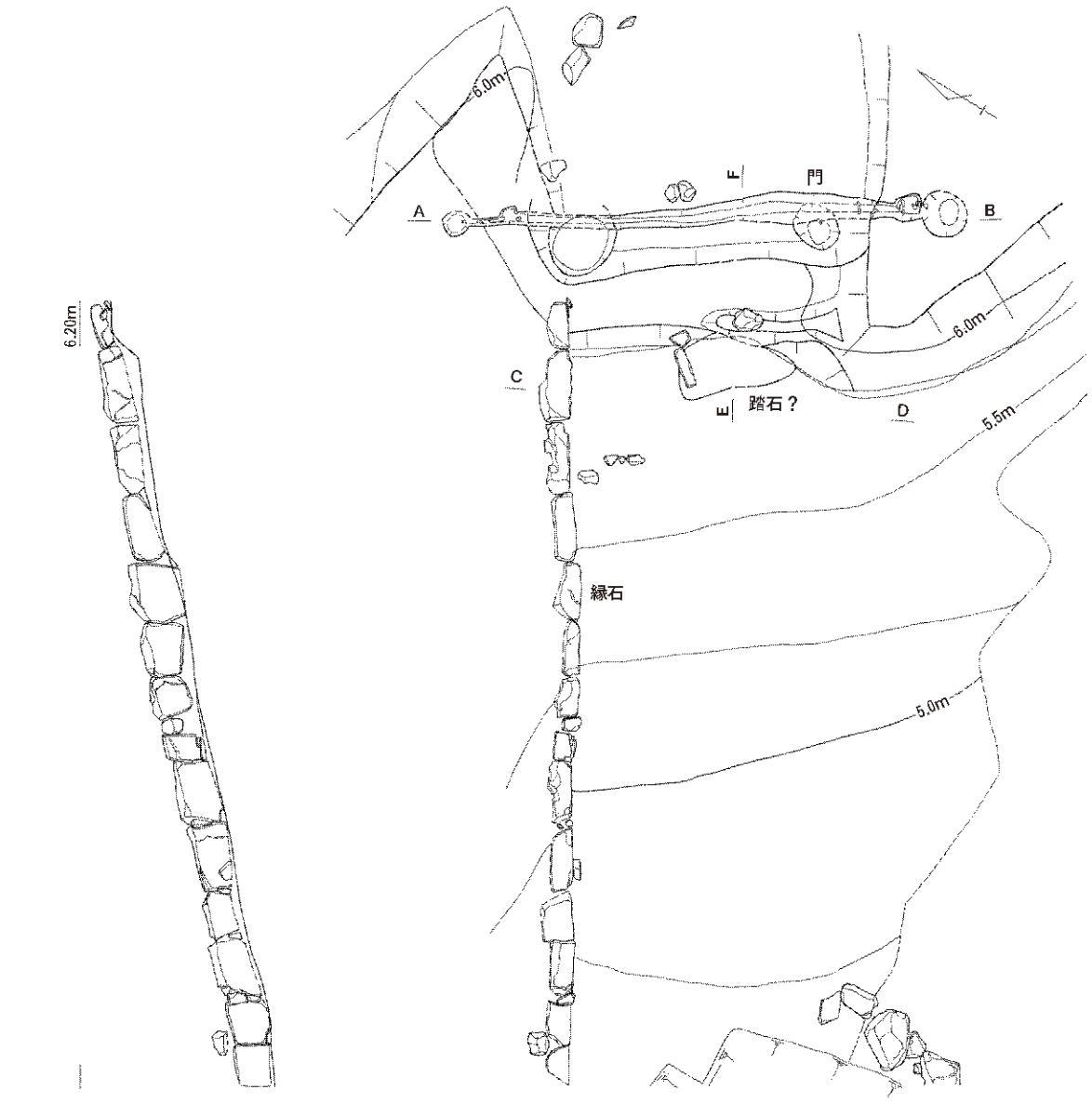
Ⅰ期の路面の上層で検出したもので、通路１と鋭角に接続している。北西側には長さ20～30㎝の石材を並べて土手の土留めを兼ねた高さ40㎝の縁石を設けているが、南東側は斜面に向かって開放している。南西端の標高は4.6ｍであり、雁木の上端との差が少なく、雁木はこの段階で埋没していたかどうか判然としない。門を検出した中央部の標高は5.9ｍを測り、御舟入から12°の勾配で上ってきた路面はこれを境に園内へ向け下っていく。細礫の敷設は見られないが、路面を覆う細礫混じりの土からは江戸時代末の陶磁器**１**～**４**や瓦**５**が出土した。　（小林）

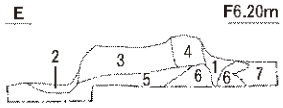
土手（第９・10・13・20・21図、図版８）

Ⅰ期の土手の上に砂質土を高さ1.2ｍにわたって盛り上げたもので、Ⅰ期の園路は埋め込まれて基底部幅は６ｍに拡がり、ほぼ現状の規模に匹敵する。門を構成する柱列に向って黄褐色土層が幾重にも積み上げられており、門の建造と同時か、それより遅れて土手の築成が行われたものと思われる。　（小林）

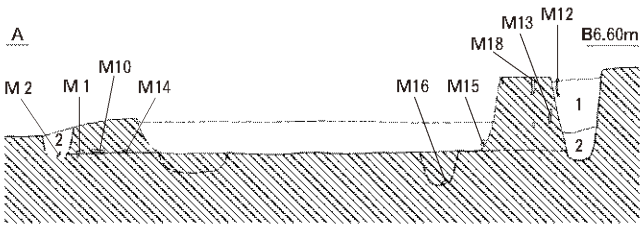


第20図　Ⅱ期の遺構（1/150）

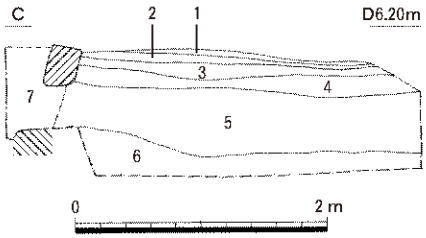




1　にぶい黄褐色（10YR5/3）シルト質細砂…木材痕跡
2　にぶい黄褐色（10YR5/3）砂質土
（２～４cm細礫多含）…踏石？
3　褐色（10YR4/4）シルト質細砂…Ⅱ期の通路２路盤
4　黄褐色（10YR5/6）シルト質微砂…木材掘り方
5　褐色（10YR4/6）シルト質細砂
6　明黄褐色（10YR6/8）シルト質微砂（硬質）…門付近の盛土
7　褐色（10YR4/6）シルト質微砂…Ⅱ期の通路２路盤

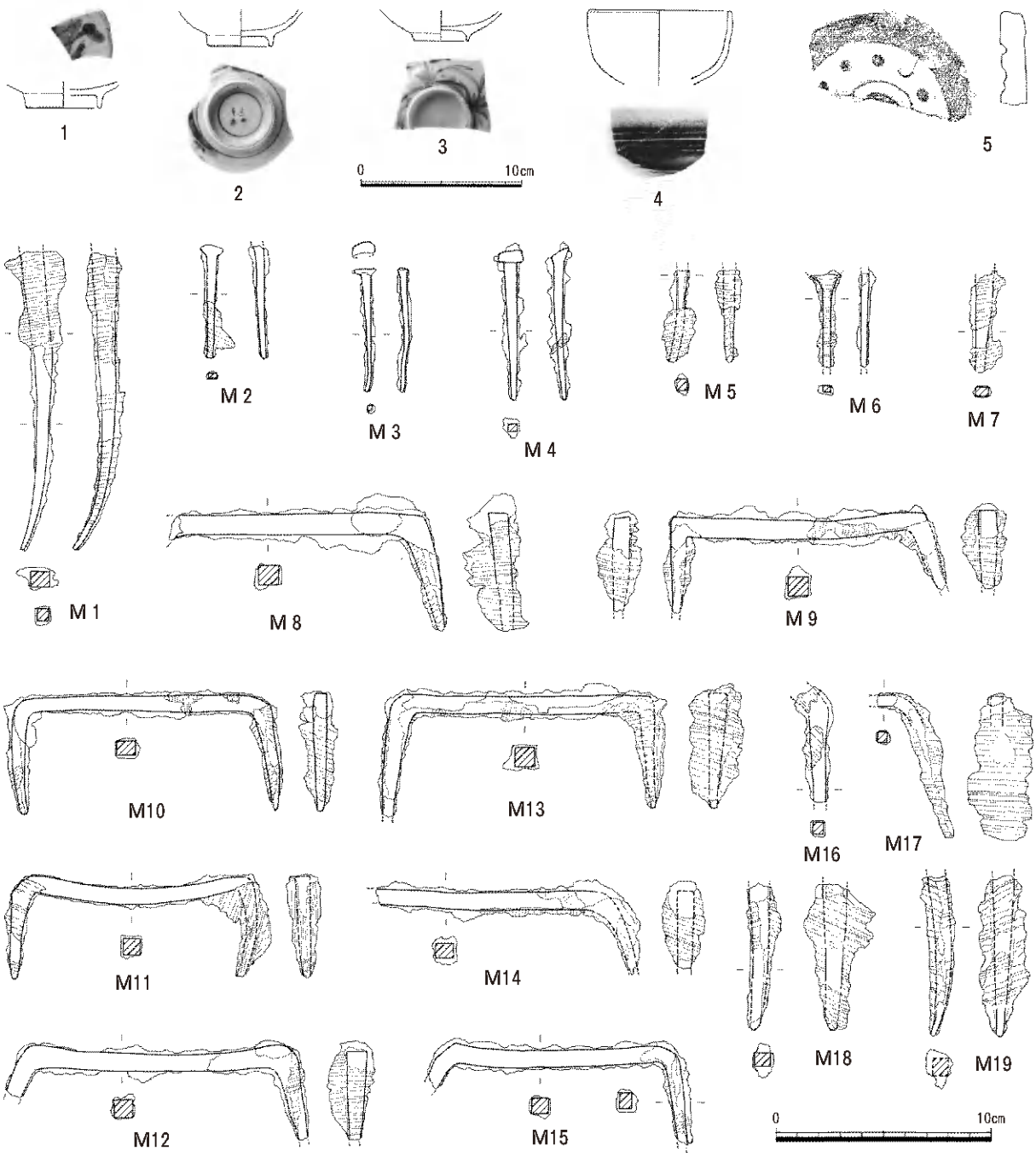


1　黄褐色（10YR5/6）シルト質微砂
2　黄褐色（10YR5/8）シルト質微砂



1　にぶい黄褐色（10YR4/3）シルト質微砂と細礫層
…Ⅱ期の通路２路盤①
2　褐色（10YR4/4）シルト質細砂
3　にぶい黄褐色（10YR4/3）砂質土
（２～３cm細礫多含）…Ⅱ期の通路２路盤②
4　褐色（10YR4/4）シルト質微砂（黄色土ブロック含）
5　褐色（10YR4/4）シルト質微砂…Ⅱ期の通路２路盤③
6　褐色（10YR4/6）シルト質微砂…Ⅰ期の通路２路盤
7　にぶい黄褐色（10YR4/3）シルト質微砂…土手盛土

第21図　Ⅱ期の通路２および門（1/60）



第22図　Ⅱ期の通路２および門出土遺物（1/3・1/4）

門（第９・20～22図、巻頭図版１、図版６・10）

通路２の中央で検出した４本の柱列である。通路を挟む土手に4.35ｍの間隔で柱を掘り据え、扉を取り付ける親柱との間を横板で繋ぎとめる構造をとる。2.5ｍを測る間口は、御舟入側を幅90㎝、高さ30㎝にわたって一段高くしつらえ、その手前には踏み石の据え跡と見られる細礫の集中か所（100×60㎝）が遺存していた。横板を上下に繋ぎとめた鎹が12点出土している。鎹の大半は、手部に木材が残存したおり、板目は直交か斜めに向く。４点（**Ｍ９・10・11・14**）が北側土手付近、８点（**Ｍ８・12・13・15～19**）が南側土手付近から出土した。全長が12㎝前後のものが多く、花交の池木製樋管使用の鎹と比べるとやや小さい寸法である。（小林）

（３）Ⅲ期の遺構

通路１（第９・10・23図、図版７）

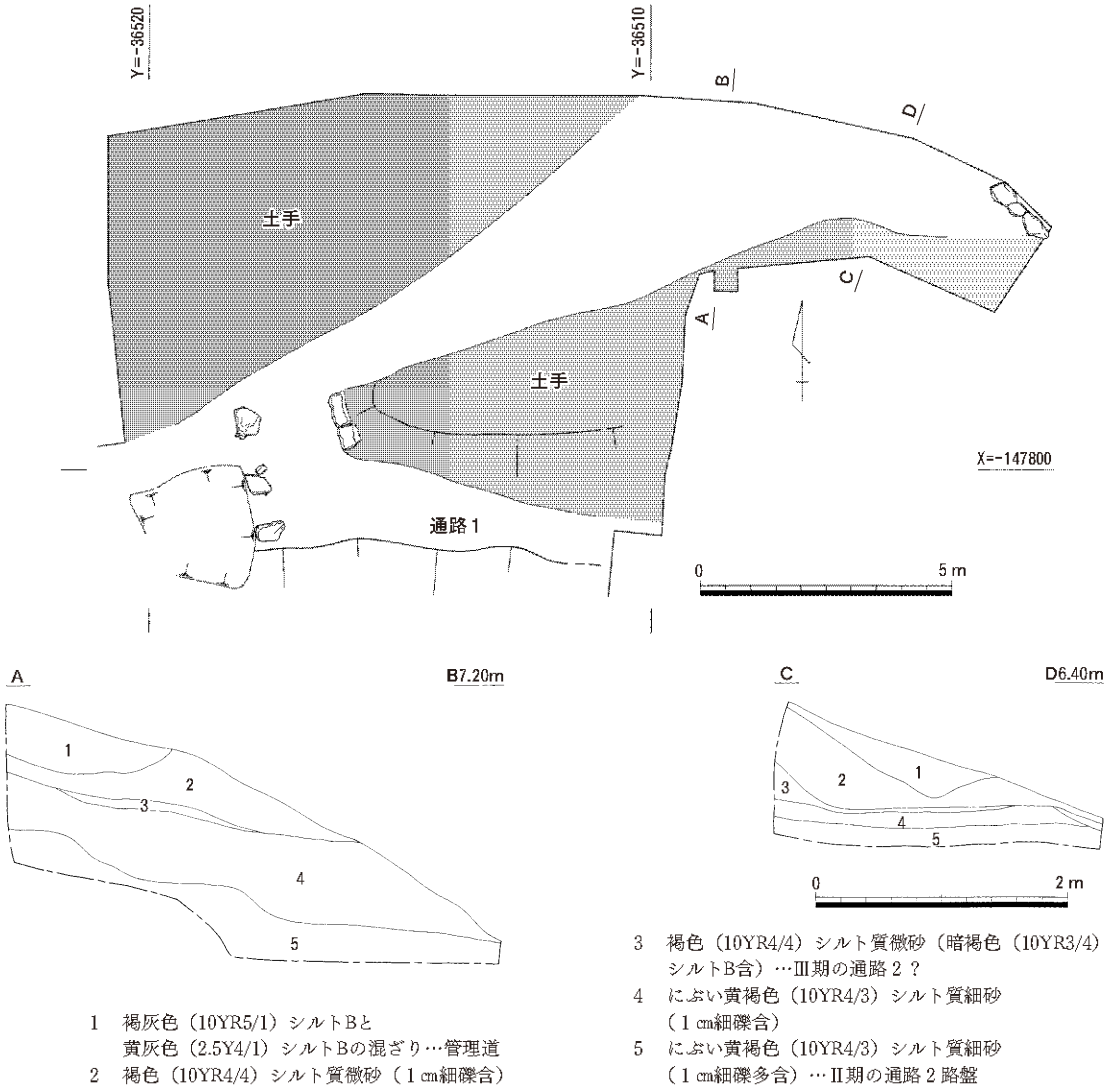
御舟入内を東西に走る通路であるが、Ⅰ期とⅡ期がほぼ同位置に存在していたのに対し、この時期は北側に寄り土手に近づく位置になり、高さもⅡ期より1.3mほど上がり、路面標高は5.5mになる。幅が1.5m程になり、前時期より70cmほど狭くなる。（小林）

通路２（第10・12・23図、図版７）

通路１と接続する場所で南北に並んでいる60cmの石材３つを検出した。75cmの間隔を保って据えられた石材の高さは一定で、何らかの構造物の一部とも考えられたが、その性格を明らかにすることはできなかった。また、その1.5m東側では、西に面をなして南北に並ぶ２つの石材を確認した。この時期の通路は、この石材を階段にして土手上を通り園内に至ったものと思われ、前時期までの通路面は窪みでしかなくなる。（小林）

土手（第９・10・12・23図、図版７）

Ⅱ期の土手と高さは変わらないが、南側では基底部幅が４mになり、御舟入側の斜面が緩やかになる。この時期は、土手上が通路として使用されたと思われる。（小林）



1　褐灰色（10YR5/1）シルトBと
　　黄灰色（2.5Y4/1）シルトBの混ざり…管理道
2　褐色（10YR4/4）シルト質微砂（１cm細礫含）
3　褐色（10YR4/4）シルト質微砂（暗褐色（10YR3/4）シルトB含）…Ⅲ期の通路２？
4　にぶい黄褐色（10YR4/3）シルト質細砂（１cm細礫含）
5　にぶい黄褐色（10YR4/3）シルト質細砂（１cm細礫多含）…Ⅱ期の通路２路盤

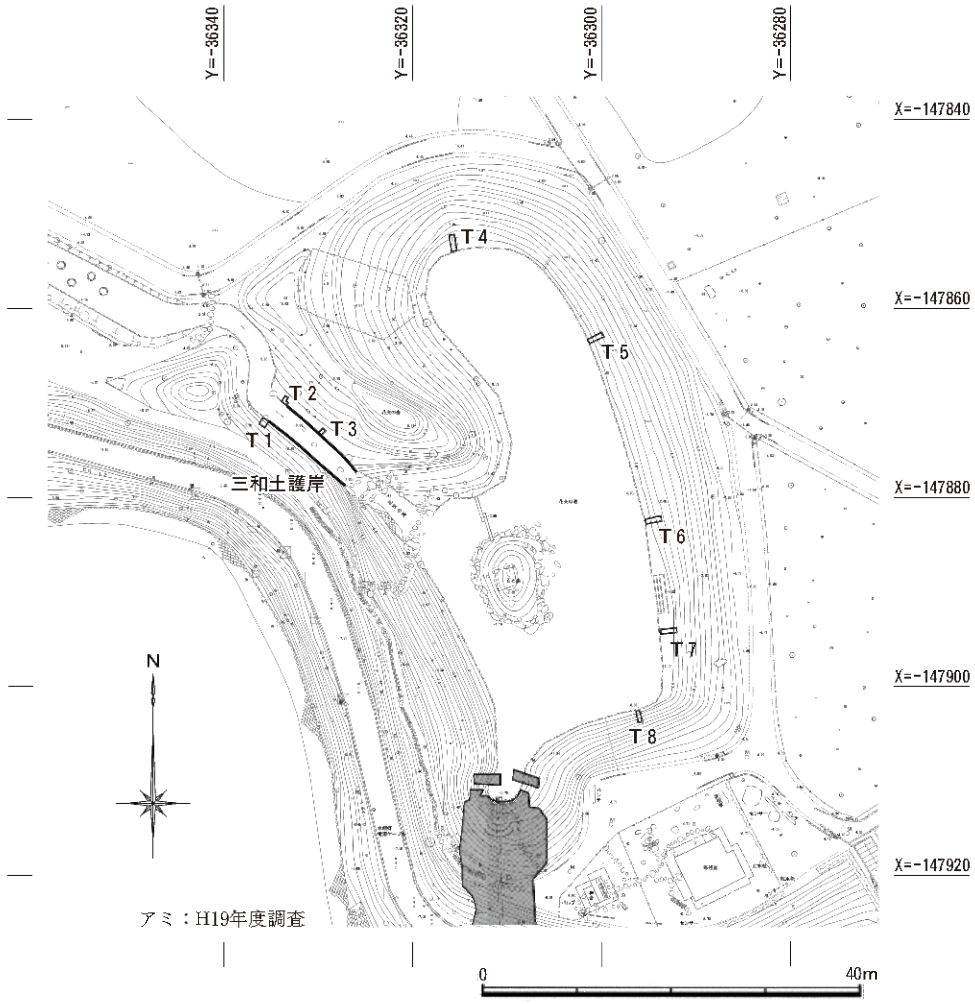
第23図　Ⅲ期の遺構（1/150・1/60）

第２節　花交の池の調査（第24・25図、図版９）

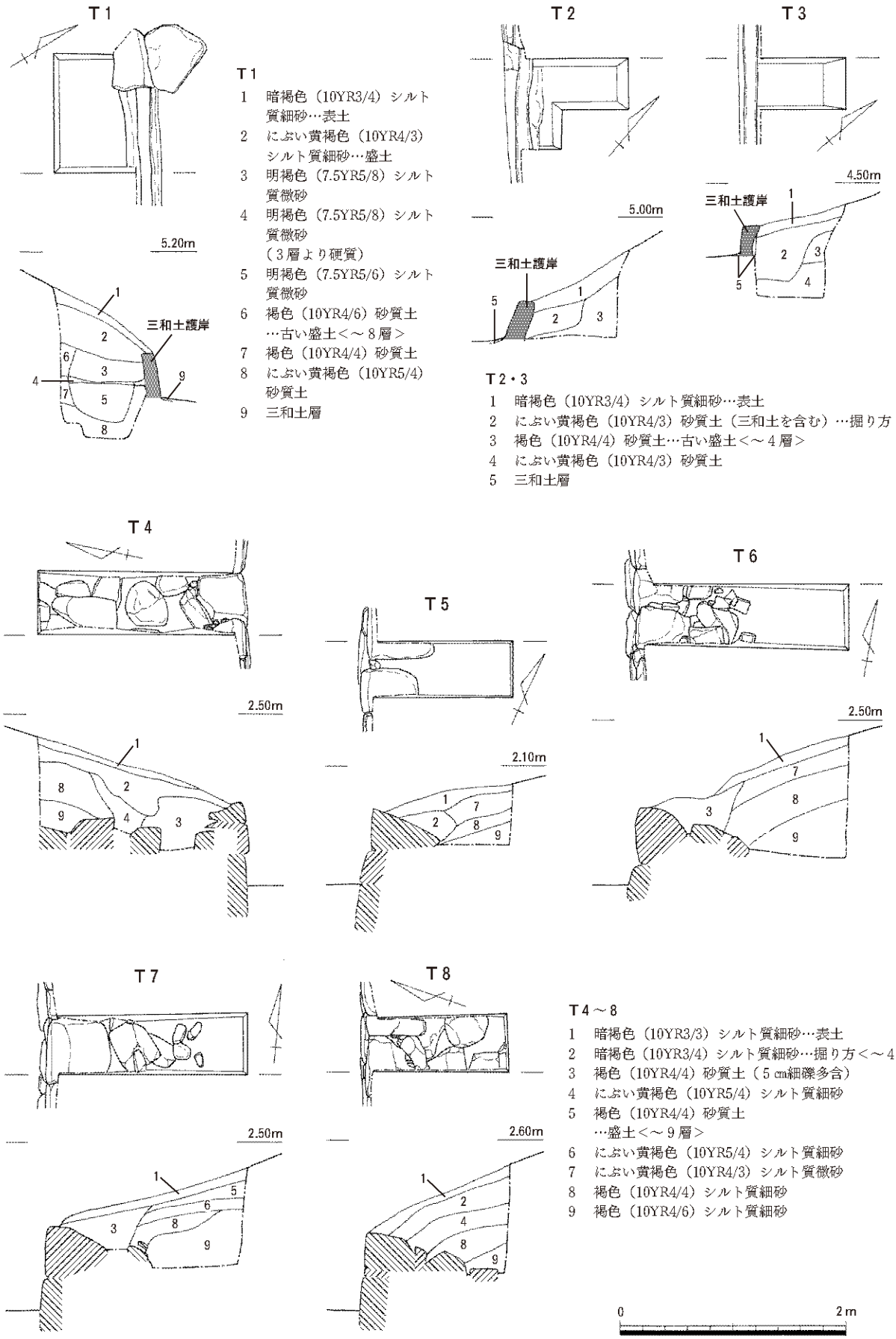
今回の調査は、曲水および花交の池において江戸時代の護岸の有無を確認するため、花交の滝上流の水路部分に３か所、池本体部分に５か所のトレンチを設定して実施した。花交の池では、平成19年度の確認調査で、池南側の樋門付近において現在の護岸の裏側から古い護岸を検出していた。また花交の滝下付近にも同様の護岸が露出する箇所があり、池全体に広がる可能性が想定された。

水路部分３か所（Ｔ１～３）は、ともに現在の護岸の背後に石垣が存在しなかった。また当初石垣と想定した現在の護岸は、三和土を固めたものであることが確認できた。この護岸は、Ｔ１・Ｔ２付近から始まり、花交の滝の直前まで続く。この周辺の土質は砂質が中心であり、そのためこの付近に限り水の浸食を防ぐ目的で三和土を使用したものと考える。Ｔ１では、護岸内側に三和土護岸と同色の明褐色層（第25図Ｔ１の３～５層）があり、三和土護岸を付け替えた跡かもしれない。

池本体部分５か所（Ｔ４～８）でも、古い時期の護岸は確認出来なかった。しかしＴ５以外の４か所では現在の護岸の背後に径40～50㎝前後の石が多量に存在しており、江戸時代の護岸裏込めもしくは地業時に関わる痕跡と考えている。なお現在の護岸の裏込めからガラス瓶が出土しており、現在の石垣は江戸時代まで下らないものと考える。（小林）



第24図　花交の池トレンチ配置図（1/800）



T１
1　暗褐色（10YR3/4）シルト質細砂…表土
2　にぶい黄褐色（10YR4/3）シルト質細砂…盛土
3　明褐色（7.5YR5/8）シルト質微砂
4　明褐色（7.5YR5/8）シルト質微砂（３層より硬質）
5　明褐色（7.5YR5/6）シルト質微砂
6　褐色（10YR4/6）砂質土…古い盛土＜～８層＞
7　褐色（10YR4/4）砂質土
8　にぶい黄褐色（10YR5/4）砂質土
9　三和土層

T２・３
1　暗褐色（10YR3/4）シルト質細砂…表土
2　にぶい黄褐色（10YR4/3）砂質土（三和土を含む）…掘り方
3　褐色（10YR4/4）砂質土…古い盛土＜～４層＞
4　にぶい黄褐色（10YR4/3）砂質土
5　三和土層

T４～８
1　暗褐色（10YR3/3）シルト質細砂…表土
2　暗褐色（10YR3/4）シルト質細砂…掘り方＜～４層＞
3　褐色（10YR4/4）砂質土（５㎝細礫多含）
4　にぶい黄褐色（10YR5/4）シルト質細砂
5　褐色（10YR4/4）砂質土…盛土＜～９層＞
6　にぶい黄褐色（10YR5/4）シルト質細砂
7　にぶい黄褐色（10YR4/3）シルト質微砂
8　褐色（10YR4/4）シルト質細砂
9　褐色（10YR4/6）シルト質細砂

第25図　花交の池トレンチ１～８（1/50）

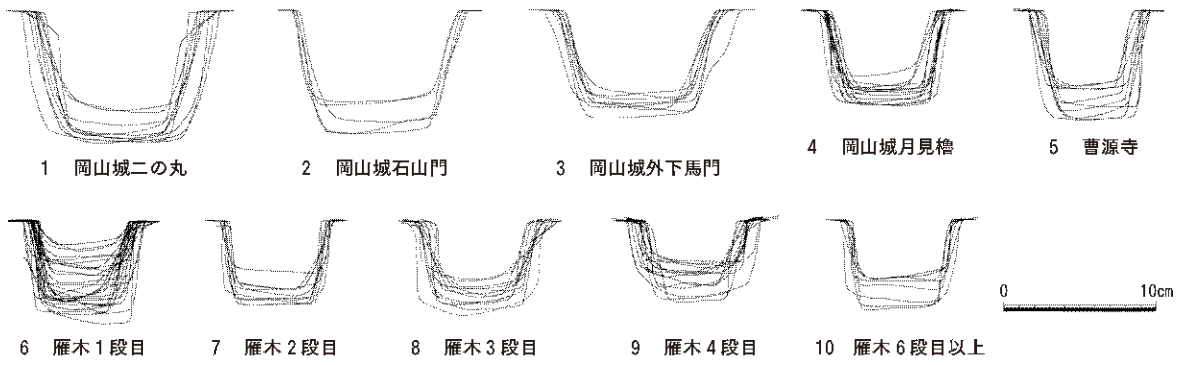
第３章　総　括

第１節　御舟入跡の考古学的検討

今回の御舟入跡の調査では、江戸時代の絵図に描かれた施設の構造が明らかとなるとともに、その移り変わり（Ⅰ～Ⅲ期）を確かめることができた。ここでは、検出遺構から御舟入跡の変遷を現代（Ⅳ期）に至るまで考えていきたい。

Ⅰ期は、御舟入跡が整備された段階で、護岸石垣・雁木・土留め石垣・通路・土手が検出される。この中でも特に雁木は、県内最大規模を誇り、また三方から昇降できる特殊な構造であった。御舟入跡と園内の間の土手はまだ低く、通路２の勾配も緩やかである。通路２はトレンチのみの確認にとどまるが、本来は御成御門が建っていたと思われる。このⅠ期の年代を決定できる資料は少ないが、雁木石材を割る際に使用した矢穴の法量から考えてみたい。雁木石材のうち、矢穴は基底部から１～５段目に多く、それより上段は６段目と13段目に各１石ずつあるにすぎない。矢穴の幅はどの段も６～８㎝前後であり、中でも７㎝前後の法量が多い（第26図６～10）。穴の法量で見る限り、どの段にも大差は見られない。この数値を、岡山城（二の丸・石山門・外下馬門・月見櫓）と曹源寺の資料で比較してみたい。岡山城二の丸・石山門・外下馬門は、17世紀初頭の築造が想定され、石垣に矢穴が残る。穴の幅は、どの施設も10～12㎝前後である（第26図１～３）。岡山城月見櫓は、17世紀前半の築造が想定され、石垣に矢穴が残る。穴の幅は７～８㎝であり、中でも８㎝前後の法量が多い（第26図４）。曹源寺は、岡山後楽園の築庭を命じた池田綱政が元禄11年（1698）に創建した寺院であり、矢穴は境内の石畳参道に残っている。穴の幅は７～８㎝であり、中でも７㎝前後の法量が多い（第26図５）。これら施設の築造年代は、二の丸・石山門・外下馬門→月見櫓→曹源寺の順になり、時期が新しくなるにつれ矢穴の幅が狭くなる。御舟入跡の矢穴幅は、これらの中でも曹源寺の資料に数値が最も近似していた。このことから雁木石材は17世紀後半～18世紀前半以降に割られた可能性があり、Ⅰ期の年代は築庭当初に遡るかもしれない。

Ⅱ期は、通路２出土陶磁器から推測して江戸時代後期になると考えている。御舟入跡と園内の間の



第26図　矢穴縦断面比較（1/5）

土手が高くなる時期であり、現在とほぼ同じ高さになる。検出遺構はⅠ期と同じであり、どの施設もほぼ同箇所で踏襲していた。また通路２上で検出した門はこの時期になる。土手の高さが変わらなくなるのに対し、通路１と盛土は、第10・11図の層位を見るかぎり以後も高さを増していく。護岸石垣・土留め石垣と雁木の基底部は、この期間に少しずつ埋まっていったと思われる。

Ⅲ期は明治時代であり、藩主が後楽園に往来することが無くなった時期である。護岸石垣・土留め石垣は完全に埋まってしまうが、雁木がこの時点でどの程度埋まっていたかは判断できない。通路２は土手上を通っていたと思われ、かつて通路があった箇所は幅が狭まり、路面として機能しなくなる。「明治の絵図」では門の隣にくぼみ状の表現があり、これがかつての通路面にあたるのかもしれない。通路１は絵図に表現されていないが、土手のすぐ南側に幅を狭めて検出されており、管理道として維持されていたと思われる。

大正時代になると、御舟入全体が確認調査や雁木の直上で見られた灰黄褐色シルト質土で覆われ、各施設は完全に埋まってしまう。さらに大正11年（1922）には外周散歩道が整備され、御舟入跡は完全に旭川と隔絶された。この時の造成土を確認調査Ｔ１・２中で見ることができるが、まだ舟溜まり部分の地表面は現在より1.5mほど低い位置にあった。この時期から戦前頃まで、旭川が増水すると御舟入内に水が入ってきていたと思われ、昭和５年（1930）の地図に表現された水跡はその名残であろう。戦後になって土手にコンクリート擁壁を設け桜を植栽した時、地表面が現在と同じ高さまで埋まる（Ⅳ期）。以後御舟入跡は、園路からも外れた竹林となり、現在に至っている。

以上のように、検出遺構から御舟入跡の変遷を見てきた。そもそも城との往来に舟を使う庭園は、江戸時代に造られたどの大名庭園にも存在しない。その意味で御舟入は岡山後楽園特有の施設であり、園の特徴を最もよく表す遺構と言える。今回の調査では、このように岡山後楽園の象徴とも言える施設を往時のまま明らかにでき、その変遷を追えた訳で、大きな成果と言えるだろう。　（小林）

第２節　絵図から見た御舟入跡の歴史と変遷

１　はじめに

今回検出した遺構は、その層位によって、大きく３時期（Ⅰ～Ⅲ期）に分けられることが判明した。ここでは、その調査成果を絵図および文献と対比することにより(1)、御舟入跡の変遷とその契機となった要因について検討したい。

２　絵図からみた雁木の変遷

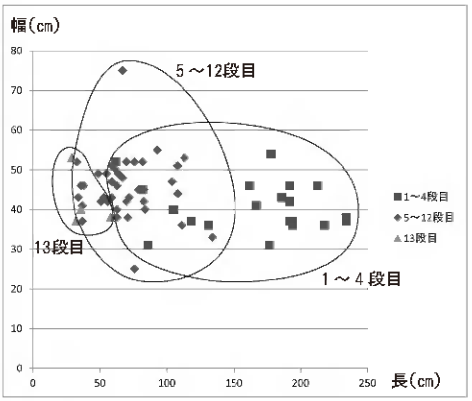
絵図に描かれた「御舟入」の様子は表１に記しているが、ここでは主に検出遺構である北岸中央の雁木の変遷について述べてみたい(2)。

雁木が明らかに認められるのは「岡山絵図」からで、旭川に沿った突堤や舟溜まりを囲う石垣と一体のものとして描かれ、そこには「御渡り場」と記載されている。これ以前の絵図では階段もしくは桟橋とも判断される構造物が描かれているのみであるが、それらの位置は今回確認した中央雁木とほぼ同位置であり、また園内への出入り口付近には門や柵などが描かれていることから、築庭当初からこの場所が特別であったことが想定される。調査で検出した雁木下段が急激に幅広くなる形態は「正

徳の絵図」からであり、それ以前では雁木幅は一定である。「正徳の絵図」では５段、「享保の絵図」では４段の雁木が描かれ、両絵図とも「がんぎ」と「南御門」の間には自然石と延石を配した通路が表現されている。この場所は、後の「明和の絵図」では階段状に表現されており、これを雁木と評価するならば、この時期までには雁木が増築された可能性がある。しかし、この絵図の雁木は「正徳の絵図」および「享保の絵図」とは異なった表現であり、また護岸石垣と思われる石垣の上からではなくその石垣と重なり、さらに同じ幅の雁木が描かれている。これに後出する「文久の絵図」では下段が急激に幅広くなる雁木が描かれ、さらに雁木から東西方向に続く土留め石垣と思われる石垣が初めて認められる。

３　雁木各段に見られる差異について

雁木は構造や石質によって、下段（西側攪乱内の石を含む）、中段、上段に分けられることを前述した。さらにこの傾向は、石材の大きさでも見ることができる。第27図をみると、大きく２つのグループ、すなわち長さが150～250㎝になる大型と150㎝未満の小型に分かれる。このうち前者は基底部から１～４段目しかあてはまらない。後者は５段目以上になるが、この中でも13段目は小さい部類に入る。この結果５段目と６段目には相違があり、構造上の境になるのかもしれない。



第27図　雁木長・幅散布図

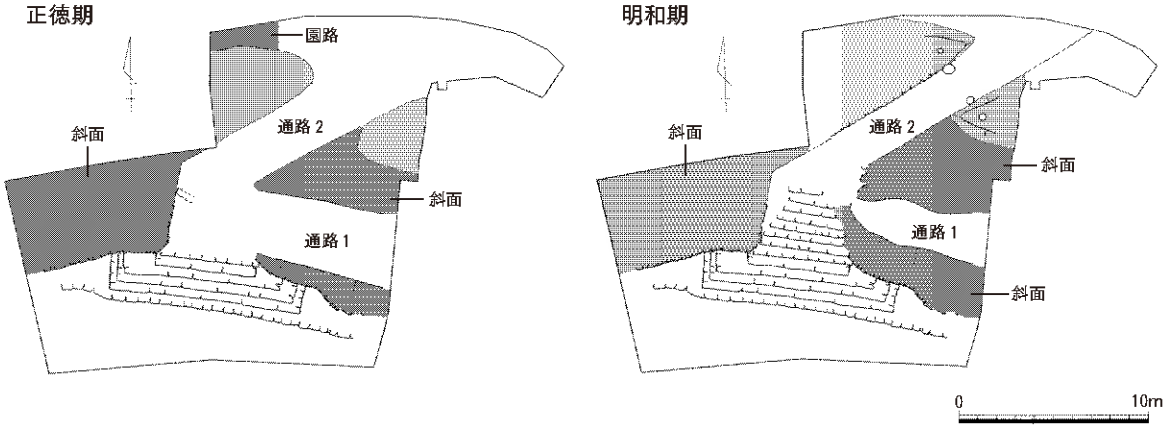
以上のように雁木は、下段、中段、上段の３つに大きく分類される。先述した絵図の変遷では、「正徳」から「明和」の間に雁木が増築された可能性も指摘できることから石質などの違いは時期差に起因する可能性がある。

４　雁木各期における通路の状況と絵図との照合

ここでは雁木各段に現れた違いを時期差と考え、絵図と照合したい。

「正徳の絵図」の時期には、雁木は下段のみであったと考える（正徳期）。西側攪乱内では、現雁木面より50㎝下で石材を検出しており、これが「正徳の絵図」に描かれた延石に対応する可能性がある。この石の標高から推測される通路２との接続部までの斜度は約20度である。この接続部の高さは標高約４ｍで、Ⅰ期の通路２の斜度から計算される先の接続部の高さと大きな差異がない。通路１は、現状での路面造成土最下層（第10図第51層、第11図第19層）を該期のものと想定している[3]。以上のように正徳期に該当する通路は、Ⅰ期のものであると考えたい。この状況を示したのが第28図左であり、「享保の絵図」と合成したのが第29図である。これを見て分かるとおり、雁木などの位置関係がほぼ一致する。その一方で、雁木背後の土留め石垣や通路２の延石の位置など細かい点で相違も認められる。特に雁木と同時期の築造が想定される土留め石垣は、絵図には表現されていない。

「明和の絵図」の時期には、雁木の中段までが増築されたと推測される（明和期）。中段の高さと、Ⅱ期の通路２の斜度から推定される高さはほぼ一致する。このことから増築された雁木に対応する通路２はⅡ期のものと思われ、埋没時期が幕末期であった当期は築造時期が明和期に逆上する可能性もある。通路１は、第10図28層もしくは46層が相当する。この状況を第28図右で示した。正徳期と比べ



第28図　絵図による御舟入復原図（1/400）

ると雁木の段数や通路１の位置、さらに土手の状況も大きく変わっている。

上段は、幕末期までに追加されたと考える。通路１・２については、大きく変わることなく、明和期のものがほぼ踏襲されていたと考えたい。

5　改築の契機について

それでは、正徳期から明和期への変化、つまり「享保の絵図」と「明和の絵図」の間に行われた改築の契機を考えてみたい。一つには岡山城下を襲った洪水が挙げられる。『御後園諸事留帳』には、洪水により度々「北御門」や「西御門」から園内へ水が流入したことや、「御成御門ニては、御門ヨリハ弐尺はかり水間御座候」などが記録されている。このような洪水によって、御舟入各施設、特に土の施設の損壊は大きかったと思われ、修復の際に雁木の増築が行われたかもしれない。また園内を守るため土手が嵩上げされたようであり[4]、それに伴って通路１・２が改築されたのであろう。二つ目には、舟溜まり内への砂の堆積が考えられる。洪水でもたらされた砂もあったが、旭川に沿った突堤の築造により御舟入内は滞水し砂が堆積しやすい。このような状況を改善するための工事[5]が行われたものの、十分な効果が得られなかったようである[6]。そのため、中央雁木へ着船できない場合には東側雁木と通路１を使用した「御渡り」が行われたのであろう[7]。また、「明和の絵図」において東側雁木付近を「御渡り場」としていることは、この頃までには東側雁木と通路１が藩主専用の施設としての役割を持ったことを示し、それに伴う通路１の改築も想定される。ところで、「文久の絵図」では現在の南門付近に新たな「御成御門」が描かれているが、これは御舟入諸施設の損壊と砂の堆積等により、御舟入内（舟溜まり）に入らずに「御渡り」するために建設されたと考えられる。この「新御

第29図　雁木下段と「享保の絵図」

成御門」建設以後は、中央雁木の重要性が低下し、さらにはその使用の停止へとつながったものと思われる。

6　おわりに

今回、「御舟入」の雁木、護岸石垣、通路などの各施設の構造やその改築の一端が明らかとなったものの、絵図や文献から読み取れる「御舟入」の変遷とは相違点も認められ、大きな課題も残された調査となった。しかしながら、絵図や文献と比較できるのも『池田家文庫』が残されているからであり、さらには岡山後楽園が幾度か甚大な被害を受けながらも廃絶されず、その復旧・保存に人々が尽力したおかげでもある。今後もこれらを後世に伝えていくことが我々の責務であることを実感した。

本稿作成にあたっては、公益財団法人岡山県郷土文化財団 万城あき氏には貴重な御助言をいただいた。また、各絵図内の文字の読解については、岡山県立博物館 竹原伸之氏に御協力をいただいた。末筆ながら、感謝の意を表したい。　（小嶋）

註

（１）巻頭図版３－２および第29図は、御舟入の周囲の構造物で位置関係や規模が大きく変化していない、園内を巡る水路、花葉の池樋門、廉池軒前の池に浮かぶ小島の位置を基準として、およそ1/100で描かれている「享保の絵図」と地形図を重ね合わせて作成したものである。

（２）「明治の絵図」以降では、「御舟入」自体が描かれていないもしくは「御舟入」内施設が埋没している表現等になっているため、ここでは「文久の絵図」までの状況を述べる。

（３）第28図左に示した通路の北辺は土手盛土から推測される土手裾、南辺は各層の落ち際を結んだものである。この両辺と雁木５段目の比高差は約80㎝であり、「享保の絵図」のように真っ直ぐ雁木５段目付近に接続するとは考えにくい。おそらく「正徳の絵図」のように雁木の手前で強く北側に屈曲し、通路２南－北方向の中間付近に接続していたと思われる。

（４）延享３年８月17日の『諸事留帳』には土手の嵩上げのことと想定される「御成御門下地上ヶ候義取懸ル」と記載されている。

（５）『諸事留帳』では、延享３年（1746）８月17日の記述に「御成御門下地上ヶ候義取懸ル」とある。

（６）突堤の分断は「享保の絵図」のみで認められ、それ以降の絵図では分断が見られないことから、この方法による砂の排出を断念し、突堤が修復されたものと思われる。また享保年間以後にも舟溜まり内の浚渫を行ったことが『諸事留帳』に記載されている。

（７）「寛保の絵図」では通路１を「御道筋」と書いており、東側雁木を使用した「御渡り」は、この頃までには行われていたと考えられる。

参考文献

神原邦男編『御後園諸事留帳』上・中・下　吉備人出版1999、2005
後楽園史編纂委員会編『岡山後楽園史』通史編・資料編2001

表１　御舟入略年表

和暦	西暦	御舟入および周辺のできごと
年未詳		「後楽園地下ヶ絵図」：後楽園築庭前の土地の様子が描かれている。
貞享４年	1687	**後楽園の造成を始める。**
元禄２年頃	1689頃	「御後園指図」：土手もしくは斜面を上がった場所に、西側へ向かう通路と門（もしくは柵）が描かれる。
元禄初期		「御後園絵図」：階段状の施設（雁木か）やそれを上がりきった園内側に柵で囲われた空間と西側に開く門が描かれる。
元禄３年頃	1690頃	「後楽園図　御茶屋廻り之図」：土手を北東方向に切った通路やその通路の途中に門が描かれる。また絵図に描かれたほかの施設の色調から、木または土の構造物として雁木（階段？）もしくは桟橋状の施設が認められる。
元禄13年	1700	**後楽園の敷地の拡大が終わる。**
元禄15年	1702	『御後園洪水被害状況報告書』に「御成御門・御成御門外の土波戸」との記載。
宝永２年	1705	洪水で御舟入の「分木」（位置など不明）で１丈８尺５寸増。
宝永４年頃	1707頃	**『池田家履歴略記』には仮橋が架かったとある。**
宝永５年頃	1708頃	「岡山絵図」：初めて旭川に沿った突堤や舟溜まりを囲む石垣等が描かれた絵図。西側および北岸中央に雁木が描かれる。
正徳元年	1711	洪水で御舟入の「分木」（位置など不明）で６尺３寸増。
正徳２年頃	1712頃	「御後園地割御絵図」：舟溜まり西岸・北岸中央・東側に雁木が描かれる。御舟入と園との境界には、「水除藪」と書かれた土手が巡り、東側雁木から御舟入北東側の「水除藪」南側を通り、北岸中央雁木の最上段付近に接続する通路（以下、通路１）が描かれる。東側雁木の西側、舟溜まりが旭川へと開口する場所には突堤が築かれている。北岸中央雁木の北側には、雁木から「水除藪」まで真直ぐに北に向かい、その際で北東へ向きを変えて「水除藪」を斜めに断ち切っている自然石と延石が敷かれた通路（以下、通路２）が描かれている。この通路の途中に「南御門」と書かれた「御成御門」が建っている。
享保元年頃	1716頃	「御茶屋御絵図」：「正徳の絵図」とほぼ同じ内容であるが、旭川に沿った突堤が分断され、東側雁木の西側にあった突堤が消されている。
享保17年	1732	**『御後園諸事留帳』（以下、『諸事留帳』）の記載が始まる。**
元文３年	1738	洪水により「御成御門ニてハ、御門ヨリハ弐尺はかり水間御座候」との記載。
寛保３年頃	1743頃	「御後園下図」：東側雁木から続く通路１には「御道筋」と書かれる。
延享３年	1746	「御成御門下地上ヶ候義取懸ル」との記載。
延享４年	1747	藩主帰国前の園内掃除で「御成御門外御渡り場御船手」が「埋りい申所掘候事」とあり、舟溜まりの浚渫を行う。
宝暦10年	1760	洪水により、「御成御門外、…土手（旭川に沿った突堤もしくは園との境界の土手か）」が崩落する。
明和８年	1771頃	「御後園絵図」：通路２が門付近まで続く７段の雁木状施設で表現される。通路１は新たに表現された階段状施設（雁木？）の最上段に接続している。東側雁木が幅広く表現され、広い「御渡り場」が描かれる。「享保の絵図」で描かれた突堤の分断はなくなっている。
天明５年	1785	洪水により、「御成御門外御道（通路１か）石垣（土留め石垣か）」が損壊する。
享和３年	1803	御舟入が洪水の度に砂で埋まるため、浚渫工事を普請方に申請する。
文化元年	1804	「御船着之石垣損し」のため、修理を依頼する。併せて昨年11月に申請した浚渫工事についても問い合わせる。
文化10年	1813	「古御成御門」という記載。
文化15年	1818	「新御成御門」という記載。
文政２年	1819	「新御成御門外波戸」が少し損壊する。
文政12年	1829	「御成御門外芝手」が損壊する。
天保７年	1836	洪水により堆積した「御成御門外舞上ヶ砂」を取り除く。
嘉永５年	1852	「新御成御門外石垣所々損」しているので、修理を依頼する。
万延元年	1860	「御成御門」を建て替える。
文久３年	1863	「御後園絵図」：現在の南門付近に「御成御門」（『諸事留帳』の「新御成御門」と思われる）が描かれる。それまでの御成御門の場所には「古御成御門」と書かれている。
年未詳		「御後園御成御門筋絵図」：「文久の絵図」とほぼ同じ内容。ただし、朱線で加筆された内容がある。
慶応２年	1866	『諸事留帳』に藩主および隠居が「新御成御門」や「古御成御門」より入るとの記載が多く見られる。
明治４年	1871	**「御後園」から「後楽園」と名称が改称。庭園の公開。**
明治５年	1872	**池田家一族が後楽園に移り住む。庭園の公開中止。『諸事留帳』の記載が終わる。**
明治16年	1883	「備前国岡山後楽園真景図」：現在の南門付近と御舟入を囲む土手上に門が表現されている。土手上の門から園内へ至る通路は６段の階段が設けられている。その西側には古い時期と思われる通路が描かれている。
明治17年	1884	**後楽園が岡山県に譲渡される。**
明治30年	1897	「岡山後楽園之図」：現在の南門付近のみに門が描かれ、土手上に門は見あたらない。
大正８年	1919	西外園の整備開始。
大正11年	1922	**名勝に指定される。**散歩道整備開始。
昭和５年	1930	「岡山市街地圖」内の「後楽園略図」：御舟入の北側に園の境界となる柵が描かれている。御舟入内には水を湛えた表現がされ、旭川とはつながっている。
昭和９年	1934	**室戸台風による洪水のため、園内の亭舎倒壊。**
昭和27年	1952	**特別名勝に指定される。**
昭和29年	1954	**月見橋架橋。**
昭和62年	1987	**史跡に指定される。**

第３節　文献から見た岡山後楽園の御舟入と御成御門

（公財）岡山県郷土文化財団主任研究員
万　城　　あ　き

１　築庭初期の舟着き場の変容

築庭当初の舟着き場は、築庭直前の「地下ケ図」と築庭後の絵図を比べると、庭園予定地に流れていた「溝」の河口部に当たる。二色が岡と比べると2.1mから2.4mくらい低い位置で、「溝」はさらに深い位置を流れていたから、いくらかの土地の造成を必要としたが、旭川と直結した場所でもあった。御舟入の整備過程を知る史料は現在までに確認されていないが、元禄末年から宝永５年（1708）頃と推定される「岡山絵図」や「岡山内曲輪絵図」には突堤を伴った御舟入が描かれている。

２　池田綱政の利用（元禄～正徳期）

綱政時代の後楽園を描いた「享保の絵図」を見ると、御舟入外側には中央が切り開かれた突堤、園内側には雁木と「南御門」（御成御門）があり、他に「西御門」、「北御門」、「御庭口御門」（現在の正門付近）、馬場の中央に「敲推御門」、現在の梅林の辺りに「東御門」がある。

綱政の入園経路がわかる記事では『日次記』(1) 元禄15年（1702）１月27日に、池田主膳の屋敷に出向いた後、内下馬門に帰り、城の西の道経由で「不断之御召場」から舟で後楽園に渡っている。後に、『御後園諸事留帳』(2)（以下は『諸事留帳』と略す）天保５年（1834）４月の寛彰院の帰国に当たって出された御触を参考にすると、殿様が通行する時は道筋の家臣の家々は門を閉めるとされ、人の目に触れずに後楽園と往復するには、城から舟で御成御門や西門に渡るのが簡便だったと考えられる。

また、正徳４年（1714）10月に綱政が亡くなるまで後楽園へ渡る舟の御用を勤めた小船頭の今井徳右衛門が、正徳３年６月に「御後園御船入之内川掘」に伴い「御船繦所見分御用」を勤めたとあるから、その頃に何らかの工事があった可能性がある(3)。

３　『御後園諸事留帳』に見る藩主と隠居の利用

隠居継政と藩主宗政（宝暦年間）　享保17年（1732）に『諸事留帳』（以下は年月日のみ示す）が記され始め、藩主や隠居の利用や園内の管理状況がいくらか明らかとなる。綱政の子継政が後楽園を頻繁に利用し始めたのは享保10年代半ばからで、園内中央に唯心山やひょうたん池を造り、能舞台周辺を改築した。当時、母栄光院もよく後楽園に訪れたが、多くの場合、利用した門は記されていない。

寛延３年（1750）６月に若殿様の宗政が初めて帰国した時の初渡りでは御成御門から延養亭に着座後、祖父綱政が篤く信仰した観音堂の慈眼堂、中の島にあった弁天から東二天などを北廻りで参拝している。継政は宝暦２年（1752）12月に致仕し、翌３年に帰国後の初渡りは西門から入った。同年５月に藩主として初めて帰国した宗政は御成御門から出入りするが、隠居継政の出入りは西門が多い。御茶屋の利用では、時には一緒に過ごすこともあるが、多くの場合は宗政と交互に訪れている。

隠居が後楽園を利用するのは継政が最初で、庭園の草木、造作については継政の意見が多く反映されているが、藩主宗政は８月15日に月見をし、隠居継政は後日にするなど、御茶屋や門の利用状況を

見ると、当主である宗政と一線を退いた隠居という格の違いを踏まえた様子がある。

隠居継政と藩主治政（明和年間の事例）　明和４年（1767）、治政が藩主として初帰国し、翌年正月の年頭は御成御門から入り、すぐ左手の地蔵堂から参拝した。隠居継政の年頭は北門から馬場を通り慈眼堂から参拝を始め、この参拝順は終生変わらなかった。後に、藩主の帰国と年頭の初渡りが仮橋から西門に入り、四天王堂から南廻りの参拝が定例となるのは、綱政から代を経て園内の祠堂への参拝が形式化したこともあるだろう。若い頃の藩主治政は武芸の稽古やお囃子で昼夜を問わず度々訪れ、御成御門に限らず、行き先に合わせて様々な門を利用している。父宗政が御成御門を多用し、武芸観覧など決められた日程を日中に淡々とこなしている様子とは対照的な様子が見える。

隠居継政は藩主治政の乗馬の稽古を見たり、対面するなど孫と一緒に過ごすこともあった。治政が参府中には御成御門から出た例もあるが、在不在にかかわらず西門を多く利用している。

治政は明和６年（1769）から倹約を始め、同８年（1771）７月３日に大藪辺りに口を新たに開けるよう指示し、同年９月から人員を整理し園内の田畑を芝に変え、東門は「御〆り」とし東門番人は西と北の番人と申し合わせて勤めるよう命じている。この改革から約７年後、安永７年（1778）３月１日に藤棚の東に「新御庭口」ができる。「文久の絵図」の藤棚の東脇にある「新御門」で、藩主の通用門的な性格を持ち、場合によっては藩主以外に重臣も出入りできた。この門にも門番を置いていない。

ところで、「御〆り」とは女性の入園時に施されるもので、女性の姿が見えないように幕囲いをしたり、門や部屋の戸に鍵をかけて封印することをいうようである。宝暦９年（1759）４月28日に宗政の姫が御成御門から来園する例では、「御〆り」の場所は他の女性にならうが、御成御門は開けて「錠鑰」とも門脇の石の上に置き、当日は姫が入った後に奥向きの者が「御〆り」を確認し封印をした。西門から入る場合は通り道に幕囲いがされるが、御成御門から出入りする場合は幕囲いはされない。治政は明和８年（1771）８月６日から花畑女中の来園時は御成御門を使わせているが、姫と同様、幕囲いをしない分「御〆り」の手間が少なくて済むという配慮が働いたのかもしれない。

隠居治政と藩主斉政（文化年間の事例）　文化７年（1810）、隠居治政は江戸を引き払って帰国する。その後は、御成御門から側室や藩主斉政と一緒に出入りしたり、斉政在国中でも花畑御殿との往来には御成御門を使っている。同じ隠居でも継政とはかなり違う様相である。また、大きな行事の前後には御茶屋に逗留し始めるが、これは綱政以来、前例のない現象である。

文化12年（1815）12月の逗留では側役が寝所近くの部屋に詰めた上に御庭口と東門に門番を増員した。同14年３月４日からは隠居治政が延養亭で暮らし始め、12月には城から派遣された足軽が東門外の番所に詰め、藪外も警備し、夜廻りも担当した。逗留時には、御成御門など南に向いた門の警備は記されておらず、外部との接触が多い北門と東門の警備に重点が置かれている。

御茶屋の使い方は、親子で一緒に延養亭を利用することもあるが、能などで拝見人がいる時は舞台正面の栄唱の間は藩主斉政が使い、隠居治政は脇見所の墨流しの間を使っている。

藩主斉敏以後の幕末の藩主　斉敏以後は養子が続く。斉敏の妻は治政の娘で斉政の養女、慶政の妻は斉敏の養女、茂政の妻は慶政の娘、最後の藩主章政は鴨方藩主から本藩を継いだ。章政の妻以外は池田家の姫であった。こうした関係からか、幕末に江戸から帰国した藩主夫人たちは御成御門から出入りする様子が見られる。明治政府に城を接収され、住居を失った池田家の人々は明治５年（1872）５月から後楽園に移住するが、その寸前まで頻繁に御成御門経由で通っている。

４　門の管理と性格

門の格　藩主はどの門でも自由に使うが、藩主と藩主に直接つながりのある限られた者だけが使える最も格の高い門が御成御門で、次いで西門、それ以外の者は格に応じて出入りの門が決まる。隠居は独特の位置にあったようで、継政は女性と一緒の時は御成御門を使うが主に西門を利用する。治政は隠居になっても御成御門を使っているのは、剛毅で知られた本人の性格によるものもあるだろう。

女性の出入りでは、宝暦10年（1760）７月24日に「御内證渡り」（女性の来園と思われる）もあるから、と御成御門周辺の修理を藩に依頼したり、治政の時代には藩主に近い女性は御成御門からの出入りが多くなる。もともと御成御門は城との往来には便利な位置にあるが、その他にも出入りの警備がしやすい、「御〆り」も簡単などの理由があったのかもしれない。

藩主のお客は主に西門から出入りしたが、文化８年（1811）の治政の実弟で人吉藩隠居相良長寛、天保６年（1835）の斉敏の実祖父で薩摩藩隠居島津斉宣の来訪では、藩主・隠居の親族であり、また他藩の隠居という格を重んじたためか御成御門が使われた。

門の錠と封印　明和４年（1767）３月26日の御用所の記事に、錠だけと錠と封印のある門が示される。外部と直接関わる門では西・東・暫軒口（北門辺り）の各門は錠だけだが、ここには番所と番人が配置されている。御成御門・敲推御門は錠と封印があり、必要に応じて開閉していたようである。

前述の女性来園時の「御〆り」では、側役が先に来て門の封印を切らせて入園、再び封印の後、立番は後楽園付の者は外れて城から派遣された足軽が要所に立つ、退出時には開封するという手順である。御成御門もこうした錠と封印で守られた門と思われる。治政の改革で東門が「御〆り」になるが、その後も東門の利用はあるので、閉鎖したのではなく、御成御門などと同様、錠と封印の門になったものと思われる。また、藩主が参府中は御成御門や斉政・斉敏の頃からは西門が「御〆切」となるが、用があれば開閉された。後楽園への出入りは、藩主・隠居・藩主の子どもなど藩主一族の動向に合わせて、城と後楽園で相互に関係し、一体となって管理運営されていた様子がある。

門番　北・御庭口・東の各門は、家臣の武芸の披露や御供、領民の御庭拝見などで出入りする門として利用されたから番人は不可欠だった。門番は全員で５人から８人ほどいて、北・御庭口・東・西の各門に配置され、長屋があてがわれ家族同居の者もいた。

文化２年（1805）７月13日の事例では、御舟入の突堤外の番所に詰める「船留番」が、夜前に船で通行する者を見咎めたもののそのまま通したという不行届きで叱責されているが、「船留番」の他に城の花畑側からも川を監視していた様子がある。つまり、御成御門や新御門など南に向いた門に番人がいないのは、城と一体となって見張ることができた安全性の高い門だったことがうかがえる。

御成御門と古御成御門　文化10年（1813）６月10日に「古御成御門」、同15年１月５日、９月14日に「新御成御門」という表記がある。この頃には今回発掘された雁木に続く御成御門の他に、新しい御成御門が設置されたようである。要因としては、御舟入に砂がたまったり、土手や石垣が破損した記事がよくあるので、「明和の絵図」にある川に面した「御渡り場」のような舟の着岸が容易な場所に新たな門が造られたと思われるが、この記録が出る頃の新たな門の場所や築造の過程は不明である。また、設置から近い時期には雁木の上の門を「古御成御門」あるいは「御成御門」、新たな門を「新御成御門」と呼んでいたようで、どちらかが御成御門として固定されるのはもう少し後になるようである。その後も『諸事留帳』には「新御成御門」「御成御門」「古御成御門」の混在が続く。

文久３年（1863）３月に作成された「文久の絵図」では「御成御門」と「古御成御門」が示された。「文久の絵図」では御舟入は藪に囲まれたようになり、門も描かれないが、慶応２年（1866）11月から翌年９月にかけての記事には御成御門の入った３つの名称が混在し、御成御門が３箇所あったかのように見える。しかし、この時期には「御成御門」「新御成御門」は「文久の絵図」でいう「御成御門」を指し、「古御成御門」は雁木の上にあった門を指すことが固定化していたものと思われる。細かく書き分けたのは、藩主茂政の他に隠居や夫人たちの出入りが頻繁だったことや、記録する奉行の性格が反映されたのかもしれない。この慶応２年の煩雑な記録を残した安東金四郎は、明治16年（1883）に岡山県に後楽園を譲渡するための帳簿も作成したが、御成御門については「字古御成門」、「字御成門」と書き、全部で13組の「錠鍵」を受け渡している[4]。「明治の絵図」で門の位置を見ると、雁木の上に描かれる門が「字古御成門」、現在の南門付近に描かれる門が「字御成門」に比定できる。

つまり、格が最も高い現役の御成御門はどの時代にも一つで、旧来は御成御門であった雁木の上の御成御門は、今は御成御門ではない、という意味合いで「古御成御門」と呼び分けているのではないかと思われる。

5　明治17年の一般公開後の変化

明治17年（1884）に池田家から譲渡され、一般公開が始まる。それより以前は明治12年（1879）４月に岡山城を会場に「岡山民立博覧会」が開催されるのに合わせた特別公開などがあり、この時は渡船の入札が行われた（山陽新報明治12年３月15日）。後に「殿様の渡し場」として観光名所になった乗降場辺りだとすれば、現在の南門に近い御成御門付近が利用されたことも考えられる。

明治24年（1891）に刊行された木畑道夫の『後楽園誌』には西門・北門・園庭南の門（御成御門）について簡単な紹介はあるが、格については深く触れていない。また、岡山市中区古京町出身の文筆家内田百閒は「古里を思う　後楽園」で東門を「裏門」と呼び、めったに開いておらず門番がいたこと、城に向かっては藪であったと書き、「表門」は鶴見橋から入る北門という認識である。

大正10年（1921）からの西外園と散歩道の一連の整備で御舟入の出入口は大部分が閉じられ、藪に囲まれた。散歩道の東西を結ぶ「城見橋」の下に御舟入跡に通じる水路の跡がわずかに残っている。

昭和中期の観光ブームでは、御舟入から上がった藩主は二色が岡を抜けて栄唱橋を渡り延養亭に入るとされた。これは、当時は雁木は埋もれ、御舟入跡を西端から眺めるため、御成御門は園内側土手の本来の位置ではなく、自分が立っている前にあったような誤解が生まれたのである。今回の発掘で江戸時代の絵図や文献と一致する遺構が明確になり、藩主が生活の一部を過ごす場所としての性格、家臣・領民の利用も含めた後楽園の実像がさらに明らかとなるだろう。

謝辞　御成御門の史料の解釈についてご教示いただいた神原邦男先生、倉地克直先生、基礎データや資料を提供してくださった小嶋善邦氏に感謝いたします。

註

（１）神原邦男編『岡山藩主池田綱政の日記』吉備人出版　『日次記』（池田家文庫）の元禄９年、12年、15年、宝永２年、３年、４年、正徳元年、２年の翻刻が出版されている。

（２）神原邦男編『御後園諸事留帳』（上）（中）（下）吉備人出版 1999・2005年　享保17年から明治５年までの『御後園諸事留帳』（池田家文庫）から重要記事を抜粋して翻刻されたものが出版されている。

（３）池田家文庫『除帳』今井徳右衛門（小船頭切米30俵３人扶持）

（４）池田家文庫「諸道具目次」〔後楽園御上地ニ付諸取調書類〕明治16年

第４節　岡山後楽園御舟入跡検出園路および花交の池上流部水路護岸の漆喰の自然科学分析

独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所埋蔵文化財センター　高妻　洋成
独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所アソシエートフェロー　赤田　昌倫
京都大学大学院人間環境学研究科博士課程　柳田　明進

１　はじめに

岡山後楽園史跡整備事業に伴う埋蔵文化財調査において、漆喰を用いたものと想定される遺構が検出された。それぞれの検出地点から採集された土壌試料に対して自然科学分析を実施し、その材料的な特徴を把握することを試みた。以下に調査結果を述べる。

２　分析試料と調査方法

分析試料　調査に供した試料の詳細を以下に述べる。

試料１：後楽園御舟入園路三和土。御舟入跡の北西側で確認された硬化面から採集した土壌で、第13図の第11層にあたる。層厚は最大で10㎝未満であるが、１～２㎝大の玉砂利を含み非常に硬化していた。その時期は供伴する遺物がないため不明なものの、層序から江戸時代の土手と時期差はないと考えられる。検出位置から旧園路と想定され、現園路面とは約90㎝低い。おそらく三和土舗装されていたと考えられる。

試料２：後楽園花交の池Ｔ１漆喰層。花交の滝上流部水路に設定したＴ１で確認した護岸から採集した土壌である。護岸は上端幅が10㎝程度、下端幅が20㎝前後の厚さを測り、水路底面から約30㎝の高さである。

試料３：後楽園花交の池上の水路下段。花交の滝上流部Ｔ２付近の水路底面から採集した土壌である。水路底面は非常に硬化している。調査時には水路が機能していたため、護岸と一体で作られたのか不明であるが、護岸と同様に花交の滝から約10m上流部まで確認された。

偏光顕微鏡観察　試料をカナダバルサムで固化させた後、透明エポキシ樹脂で包埋した。包埋した試料は半裁後、エメリー紙を用いて研磨することにより薄切片を得た。得られた薄切片に対して偏光顕微鏡を用いて、－ニコルと＋ニコルでの観察をおこなった。

元素分析　各試料0.3gを硝酸、塩酸、過塩素酸で分解後、ろ過し、100mlに希釈定容したものを酸可溶分（sol液）の測定試料とした。一方、ろ紙上にろ別された酸不溶分は、ろ紙とともに灰化・溶融（融剤ホウ酸リチウム）した後、塩酸溶液にて溶解させ、200mlに定容した。この溶液を酸不溶分（insol液）の測定試料とした。

元素分析は、アルミニウム（Al）、バリウム（Ba）、カルシウム（Ca）、クロム（Cr）、鉄（Fe）、カリウム（K）、マグネシウム（Mg）、マンガン（Mn）、リン（P）、イオウ（S）、ケイ素（Si）、ストロンチウム（Sr）、チタン（Ti）、バナジウム（V）、亜鉛（Zn）およびジルコン（Zr）については誘導結合プラズマ発光分光分析（Inductivity Coupled Plasma, ICP）を、ナトリウム（Na）についてはフレーム原子吸光光度法により、および塩素（Cl）についてはイオンクロマトグラフィにより分析した。ICP

には島津製作所製ICPV-1017型およびSIIナノテクノロジー製SPS3100HVUVを、フレーム原子吸光光度分析には日立製作所製Z-2300型を、ならびにイオンクロマトグラフィには島津製作所製prominence-SP型を用いた。定量はSPEX製標準溶液を用いて検量線を作成することによりおこなった。

強熱灰化減量　試料0.5gを白金るつぼに秤量し、1000℃で強熱灰化し、重量減少を測定し、強熱灰化減率として百分率で求めた。

X線回折分析（XRD）　試料はメノウ製乳鉢をもちいて粉末状とした後にXRD用フォルダーに充填し、測定に供した。XRDはマック・サイエンス社製MX18XHF-SRAを使用した。管電圧および管電流は40kVおよび100mAとした。測定は走査範囲を５～80°とし、走査速度を1.000deg/minとしておこなった。なお、測定時の対陰極は銅（Cu）であった。

フーリエ変換赤外分光分析（FT-IR）　FT-IRは、波数分解能４㎝$^{-1}$で400㎝$^{-1}$から4000㎝$^{-1}$をスキャン回数32回でおこなった。測定にはBruker Optics社製ALPHA（ATR platinum Diamond 1 Reft）を使用した。

なお、元素分析と強熱灰化減量は株式会社住友金属テクノロジーに委託しておこなったものである。

３　結果と考察

偏光顕微鏡観察　第30図に各試料の偏光顕微鏡写真を示す。試料１ではほとんど炭酸カルシウムを確認することはできなかった。また、試料２および試料３では、全体に炭酸カルシウムの小さな結晶が散在している様子が観察された。

元素分析　元素分析の結果を酸化物に換算して表２に示す。いずれの試料も二酸化ケイ素（SiO_2）の含有率が高く、特に御舟入園路たたきと想定されている試料１においては重量百分率で60％を超えている。また、酸化アルミニウム（Al_2O_3）の含有率も高く、土を多く含むことが明らかである。一方、酸化カルシウム（CaO）の含有率は試料２と３がそれぞれ12.64％および14.09％であるのに対し、試料１では1.66％ときわめて低かった。各試料の酸化カルシウムを炭酸カルシウム（$CaCO_3$）として換算すると、試料１で2.95％、試料２で22.55％および試料３で25.16％となる。表２には強熱灰化減量（Igloss）も併記しているが、その値は試料１で4.88％、試料２で23.2％および試料３で25.6％となる。炭酸カルシウム含有率と酸化カルシウム含有率の差は、強熱灰化により減量する二酸化炭素（CO_2）の含有率に相当すると考えることができる。強熱灰化減量の値が炭酸カルシウムから減量する値よりも高いことは、炭酸カルシウム以外に強熱灰化により減量する成分が含まれていることを示唆するものである。

X線回折分析（XRD）　XRDの測定結果を第31図に、検出された化合物を表２に示す。試料１では石英（SiO_2）、曹長石（$(NaCa)Al(Si_3Al)_3O_8$）および白雲母（$KAl_2(Si_3Al)O_{10}(OHF)_2$）および緑泥石類の粘土鉱物が検出された。これらの化合物は土壌に由来するものと考えられる。一方で、試料２および３では石英や粘土鉱物とともに方解石（$CaCO_3$）が検出された。また、試料３ではギブサイト（$Al(OH)_3$）も検出された。

試料１では炭酸カルシウムは検出されず、石英および長石類や粘土鉱物のみが検出されることから土壌そのもののような物質と考えられる。一方で、試料２は褐色を呈しているものの、漆喰に由来すると考えられる炭酸カルシウムを含んでいるものと考えられる。また、試料３は試料２と同様に炭酸カルシウムを含むが、元素分析およびXRDの結果から試料２に比べて炭酸カルシウムの含有量が高いものと考えられる。

また、アルミニウムの含有量が高く、ギブサイトが形成されていることも特徴である。今回分析をおこなった３点の試料を漆喰が用いられたものと考えた場合、炭酸カルシウムと粘土および砂などの骨材の割合は顕著に異なるものと考えられる。これは用途にあわせてその組成を調整していたことが可能性の一つとしてあげられる。

フーリエ変換赤外分光分析（FT-IR）　第32図に各試料のIRスペクトルと標準試薬としての硫酸カルシウムおよび水酸化アルミニウムのIRスペクトルを示す。試料１からは3695、3619および1648㎝$^{-1}$に特徴的なピークが得られた。これらは粘土鉱物の吸着水に帰属する特徴的なピークである。また、1000㎝$^{-1}$を中心とするブロードなピークと692㎝$^{-1}$のピークはSi-Oに帰属し、912㎝$^{-1}$のピークはAl-Oに、776㎝$^{-1}$を中心とするブロードなピークはSi-SiやSi-Oに帰属すると思われる。その他650㎝$^{-1}$よりも低波数側のピークも粘土鉱物等の無機物質に帰属するものと思われる。この試料からは炭酸カルシウム、水酸化カルシウムに帰属するピークは検出されなかった。全体のスペクトルパターンから試料１は土壌であると判断されるものである。

試料２も試料１と同じく土壌の成分が強く検出された。また、1422㎝$^{-1}$および877㎝$^{-1}$に炭酸カルシウムに帰属するピークが得られた。

試料３も試料１と同じく土壌の成分が強く検出された。また、1438㎝$^{-1}$および874㎝$^{-1}$に炭酸カルシウムに帰属するピークが得られた。また、高波数側において3657、3615、3524、3449および3376㎝$^{-1}$に粘土鉱物の吸着水に帰属する特徴的なピークが得られた。この試料の吸着水のパターンは試料１とは異なることから、存在する粘土鉱物の種類が異なることが考えられる。試料３のスペクトルパターンは硫酸カルシウムとは合致しなかった。水酸化アルミニウムに関しては、高波数側の吸着水のピークのピークパターンがやや異なるものの、ピーク位置では一致している。低波数側の水酸化アルミニウムに特徴的な1100～950㎝$^{-1}$のピークパターンについて検討をおこなったが、試料３の1100～950㎝$^{-1}$のピークは複数の土壌成分が混在したピークである可能性があるため判断できなかった。

４　まとめ

岡山後楽園史跡整備事業の埋蔵文化財調査において採集された漆喰と想定される３点の試料について材料調査をおこなった。

試料１は、偏光顕微鏡観察、元素分析、X線回折分析およびフーリエ変換赤外分光分析の結果から、炭酸カルシウムの存在を示唆する結果を得ることができなかった。元素分析で得られたカルシウムについての解析結果を炭酸カルシウムに換算したとしても高々４％であり、きわめて含有率としては低い。

一方、試料２と試料３については、元素分析の結果から炭酸カルシウム含有率としては20%以上であり、X線回折分析およびフーリエ変換赤外分光分析の結果からも炭酸カルシウムの存在が示唆されている。土壌成分の存在を示す二酸化ケイ素含有率が、試料２で41.96％、試料３で31.91％と若干異なっている。このことは、三和土を施工するに際して、場所によってその組成を変えていた可能性を示すものである。

以上のことから、試料１については漆喰を用いたことは明らかとならなかったが、試料２と試料３は三和土などの漆喰が用いられた材料であり、場所に応じてその組成を調整した可能性が示唆されるものということができる。

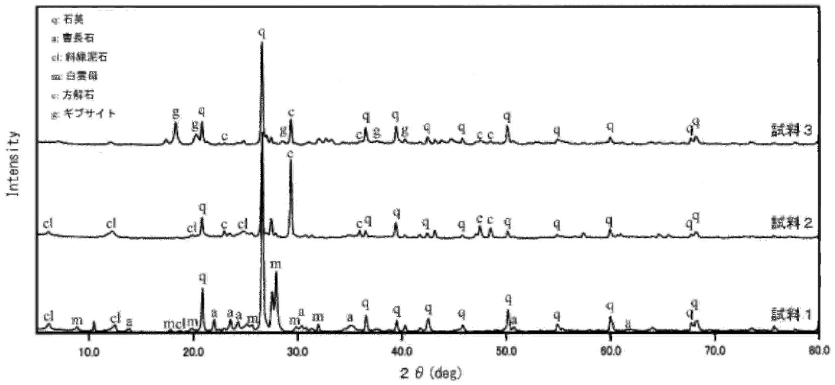
第30図　漆喰試料の偏光顕微鏡写真（写真は＋ニコルでの観察）

表２　漆喰試料の化学成分分析

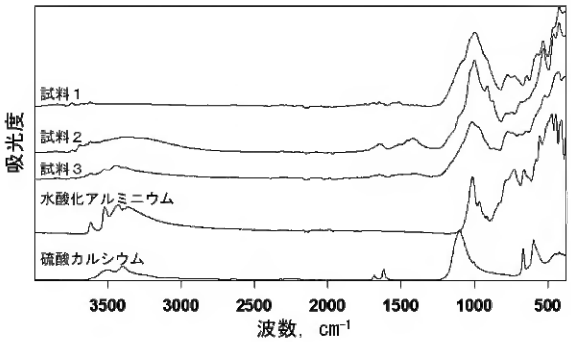
		Al_2O_3	BaO	CaO	Cr_2O_3	Fe_2O_3	K_2O	MgO	MnO	P_2O_5	SO_3
試料１	sol	6.55	0.01	0.51	0.01	4.55	0.37	1.13	0.10	0.09	0.02
	Insol	8.79	0.04	1.14	0.01	0.84	1.96	0.62	0.03	<0.01	<0.01
	total	15.34	0.05	1.66	0.02	5.38	2.32	1.75	0.12	0.1	0.02
試料２	sol	9.42	0.02	12.38	<0.01	5.42	0.15	0.90	0.07	0.13	0.04
	Insol	2.95	0.03	0.26	<0.01	0.21	1.16	0.06	0.01	<0.01	<0.01
	total	12.37	0.04	12.64	<0.01	5.62	1.31	0.96	0.08	0.13	0.04
資料３	sol	18.44	0.04	14.05	0.04	1.13	0.04	3.97	0.03	0.05	0.19
	Insol	1.21	0.01	0.05	0.02	0.05	0.62	0.04	<0.01	<0.01	<0.01
	total	19.64	0.04	14.09	0.07	1.18	0.66	4.01	0.03	0.05	0.19

上段からの続き

		SiO_2	SrO	TiO_2	V_2O_5	ZnO	ZrO_2	Na_2O	Cl_2	Igloss	Total
試料１	sol	0.07	<0.01	0.38	0.02	0.01	<0.01	-	-	-	-
	Insol	63.22	0.02	0.38	0.01	<0.01	0.03	-	-	-	-
	total	63.29	0.02	0.76	0.03	0.03	0.03	2.21	<0.01	4.88	98.0
試料２	sol	0.09	0.03	0.50	0.02	0.01	<0.01	-	-	-	-
	Insol	41.88	<0.01	0.23	0.01	0.02	0.01	-	-	-	-
	total	41.96	0.03	0.74	0.02	0.03	0.02	0.34	0.001	23.2	99.5
資料３	sol	0.13	0.02	1.05	0.03	0.01	0.05	-	-	-	-
	Insol	31.79	<0.01	0.06	<0.01	<0.01	0.02	-	-	-	-
	total	31.91	0.02	1.11	0.03	0.01	0.07	0.36	0.002	25.6	99.1



第31図　漆喰試料のX線回折分析



第32図　漆喰試料のFT-IR分析

御舟入跡

1　御舟入跡全景（南から）

2　御舟入跡全景（南東から）

3　雁木検出状況（南から）

4　雁木等検出状況（西から）

図版 2

御舟入跡

1　雁木下段と東側土留め石垣（南から）

2　雁木下段東側（南東から）

3　東側土留め石垣と平坦面（西から）

4　雁木下段と東側土留め石垣（南東から）

5　雁木下段東側（東から）

1　雁木と西側土留め石垣（南から）

2　西側土留め石垣と平坦面（南東から）

3　雁木下段西側（南西から）

4　雁木下段西側（西から）

5　雁木下段と西側土留め石垣（南西から）

図版 4

御舟入跡

1　雁木中段東端（南から）

2　東側土留め石垣北端（南西から）

3　東側土留め石垣屈曲部（南から）

4　西側土留め石垣（南東から）

5　西側土留め石垣屈曲部（南西から）

6　雁木中段と西側土留め石垣（南から）

1　護岸石垣西側（南から）

2　護岸石垣中央西側（南から）

3　護岸石垣中央東側（南から）

4　護岸石垣東側（南から）

5　矢穴のある雁木石材（南から）

6　雁木石材の矢穴（南から）

7　段状に加工した雁木石材１（南から）

8　段状に加工した雁木石材２（南から）

図版 6

御舟入跡

1　門（北西から）

2　門（南西から）

3　門断面（南西から）

4　II期の通路 2 縁石（東から）

5　門付近鎹出土状況（南東から）

6　I 期の通路 2 南側集石（北西から）

7　I 期の通路 2 北側集石（北西から）

御舟入跡

1　Ⅰ期の園路
（東から）

2　Ⅲ期の通路１・２
（西から）

3　Ⅰ期の通路１
（西から）

図版 8

御舟入跡

1　西壁南側（東から）

2　西壁北側
（東から）

3　北壁（南から）

4　東壁北側（北西から）

花交の池

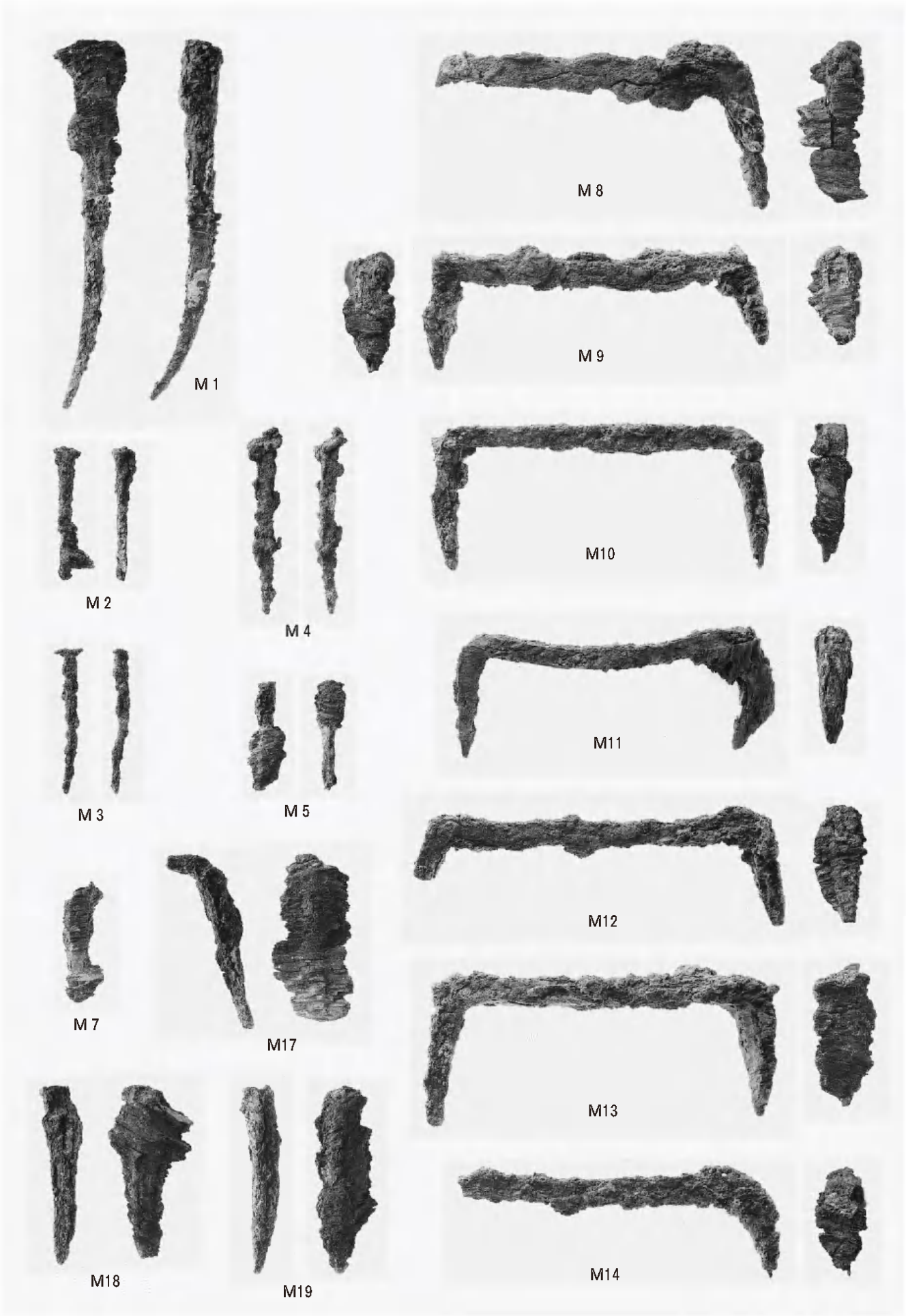
1　トレンチ 1 三和土護岸（北東から）

2　トレンチ 3 三和土護岸（北東から）

3　トレンチ 6
（北から）

4　トレンチ 8
（東から）

図版10



門出土鉄器

報告書抄録

ふ り が な	とくべつめいしょうおかやまこうらくえん　しせきおかやまじょうあと
書　　名	特別名勝 岡山後楽園　史跡 岡山城跡
副 書 名	岡山後楽園史跡整備事業に伴う発掘調査
巻　　次	
シリーズ名	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告
シリーズ番号	238
編 著 者 名	小林利晴・小嶋善邦・上栫　武・石田爲成・宇垣匡雅・万城あき・高妻洋成
編 集 機 関	岡山県古代吉備文化財センター
所　在　地	〒701 0136　岡山県岡山市北区西花尻1325 3　TEL 086 293 3211
発 行 機 関	岡山県教育委員会
所　在　地	〒700 8570　岡山県岡山市北区内山下2 4 6　TEL 086 224 2111
発行年月日	2013年3月15日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	発掘期間	発掘面積 (㎡)	発掘原因
特別名勝 岡山後楽園 史跡 岡山城跡	岡山市北区 後楽園1 5	33101	332012294	34°40′01″	133°56′05″	20110601～20110621 20120123～20120130 20120125～20120126 20120402～20120711 20120620～20120706 20120702	490	保存目的調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
特別名勝 岡山後楽園 史跡 岡山城跡	庭園	江戸	護岸石垣、雁木、土留め石垣、通路2、門1、園路	陶磁器、鉄器（鎹・釘）	岡山後楽園の舟着き場である御舟入跡の調査。雁木は県内最大規模で、三方から昇降できる特殊な構造。

要約

岡山後楽園は江戸時代に築庭された大名庭園であり、その一画に岡山藩主専用の舟着き場である御舟入跡が存在する。今回の調査箇所はこの御舟入跡で、護岸石垣・雁木・土留め石垣・土手・通路・門などの施設を検出した。このうち雁木は、13段からなる階段状の石段で、護岸石垣の上に構成される。規模の上では岡山県内最大規模を誇り、また三方から昇降できる特殊な構造であった。雁木と園内の間には土手が築かれており、通路はそれを斜めに横切るように設けられる。この土手と通路は何回かの作り替えがあり、その移り変わりを確かめることができた。このように、今回の調査では御舟入跡の構造が明らかになり、ことに雁木は、規模や特殊な構造からしても大名庭園の玄関口にふさわしい格式を備えていた。

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 238

特別名勝 岡山後楽園
史　　跡 岡 山 城 跡

岡山後楽園史跡整備事業に伴う発掘調査

平成25年３月８日　印刷
平成25年３月15日　発行

編　集　　岡山県古代吉備文化財センター
　　岡山県岡山市北区西花尻1325-3
発　行　　岡山県教育委員会
　　岡山県岡山市北区内山下2-4-6
印　刷　　株式会社 中野コロタイプ
　　岡山県岡山市北区玉柏390